

## 加波山事件大審院判決書

寺 崎 修

明治十七年九月、自由党急進派の富松正安、河野広躰ら十六名が、内乱陰謀の目的をもって茨城県真壁郡加波山に蜂起し、山麓に近い下妻警察署町屋分署を襲撃するとともに、長岡曙で警戒中の警察官と衝突し、双方に死傷者を出すという事件が勃発した。いわゆる加波山事件がこれである。

この事件については、すでに多くの資料的文献が公刊されており、諸先学による研究成果も多数発表されつつあるが、<sup>(1)</sup>この事件のもっとも基本的な資料の一つである大審院判決書については、その大部分が未発見であり、その内容は、いまだ不明のままとなっている。

最近、私は、最高裁判所において、加波山事件関係の大審院判決書原本を調査する機会にめぐまれ、その結果、従来まったく知られていなかった同事件関係の判決書原本多数を発見した。現在、最高裁判所が保管する判決書原本は、全部で十五通にのぼるが、その内訳は、次の通りである。

▽故障申し立てに対する判決書 三通

- (1) 鯉沼九八郎判決書（明治十八年六月六日判決）
- (2) 三浦文次・琴田岩松・玉水嘉一・原利八・谷津鉄之助判決書（明治十八年六月二十九日判決）
- (3) 富松正安判決書（明治十八年八月十八日判決）

▽管轄違い申し立て（第一回）に対する判決書 四通

- (4) 富松正安判決書（明治十八年十一月三十日判決）
- (5) 小林篤太郎・保多駒吉判決書（明治十八年十一月三十日判決）
- (6) 横山信六・門奈茂次郎・三浦文次・小針重雄・琴田岩松・草野左久馬・五十川元吉・玉水嘉一・原利八・内藤魯一判決書（明治十八年十一月三十日判決）

(7) 河野広躰・天野市太郎・鯉沼九八郎・杉浦吉副判決書（明治十八年十一月三十日判決）

▽哀訴に対する判決書 一通

(8) 杉浦吉副判決書（明治十八年十二月十六日判決）

▽管轄違い申し立て（第二回）に対する判決書 三通

- (9) 富松正安判決書（明治十九年四月十日判決）
- (10) 小林篤太郎・保多駒吉判決書（明治十九年四月十日判決）
- (11) 横山信六・三浦文次・小針重雄・琴田岩松・草野左久馬・五十川元吉・玉水嘉一・原利八判決書（明治十九

年四月十日判決）

▽確定判決書 四通

- (12) 横山信六・三浦文次・小針重雄・琴田岩松・草野左久馬・五十川元吉判決書（明治十九年八月十二日判決）
- (13) 保多駒吉判決書（明治十九年八月十二日判決）
- (14) 大橋源三郎判決書（明治十九年八月十二日判決）
- (15) 富松正安判決書（明治十九年八月十二日判決）

右のうち、(1)と(4)の二通の判決書は、以前に稲葉誠太郎編『加波山事件関係資料集』（昭和四十五年）に登載されたことがあり<sup>(2)</sup>、また、(12)から(15)までの確定判決書四通も、「加波山事件の裁判について——その経緯を中心に——」（昭和六十二年）と題する拙稿において、その紹介を試みたことがあるから<sup>(3)</sup>、これら六通の判決書は、決して目新しいものではない。

しかし、稲葉・前掲資料集所載の判決書には、いくつかの誤りがあること<sup>(4)</sup>、さらにまた、読者の資料利用上の便宜をはかる必要があることなどを考え、ここでは、あえて右の六通の判決書を省略することをせず、それらをも含め、十五通の大審院判決書すべてを一括して覆刻・紹介することにした。

本資料の紹介が、加波山事件の今後の研究に、多少なりとも役立つとするならば、筆者として大きなよろこびである<sup>(5)</sup>。

- (1) この事件に関する文献は、『自由民権運動研究文献目録』・昭和五十九年・四九頁以下を参照。
- (2) 稲葉誠太郎編『加波山事件関係資料集』・昭和四十五年・三四五頁—三四七頁、四九〇頁—四九二頁。
- (3) 拙稿「加波山事件の裁判について——その経緯を中心に——」・近代日本史の新研究・第VI巻・昭和六十二年・八七頁以下。

(4) たとえば、稲葉・前掲『加波山事件関係資料集』・三四五頁―三四七頁所載の鯉沼九八郎判決書中、「専任判事正治」とあるのは「専任判事正臣」、「判事土崎経典」とあるのは「判事土師経典」、「判事馬場原二郎」とあるのは「判事馬屋原二郎」のそれぞれ誤りであり、また、四九〇頁―四九一頁所載の富松正安判決書中、「判事久武昌孚」とあるのは「判事武久昌孚」の誤りである。

(5) 各判決書覆刻に際し、旧漢字体は、現在一般に使用されているものに、凡、「などの合字については、トモ、コトなどに、それぞれあらためた。

## (1) 宣 告 書

栃木県下野国下都賀郡

下稲葉村平民農

鯉沼九八郎

明治十八年四月  
卅二年三月

右九八郎カ被告事件ニ付明治十八年三月十六日栃木軽罪裁判所予審ニ於テ為シタル予審終結言渡ニ対シ被告九八郎カ故障ヲ為セシ所明治十八年四月十八日栃木軽罪裁判所會議局ニ於テ九八郎ニ対シ為シタル予審終結言渡ノ全部ヲ認可スト言渡シタル判決ニ不服被告九八郎ハ上告セリ其要領ハ第一被告カ爆発彈ヲ製造セシハ政府ヲ顛覆セントスルノ目的ナルヲ以高等法院ノ管轄ニ属スヘキモノナルニ予審判事ハ之ヲ強盜故殺等ノ事件ナリトシ栃木重罪裁判所ヘ移スノ言渡ヲ為シタルニ付故障ヲ為シタルニ會議局ニ於テハ被告ノ所為ヲシテ名ヲ国事犯ニ仮リ強盜ヲ為シタルモノナリト(マ)簡短ナル理由ヲ以故障ヲ棄却シタルモ被告カ名ヲ国事犯ニ仮リ強盜ヲ犯スノ共謀タル事実ノ理由並ニ証憑ヲ弁明セサ

ルハ不法ノ判決ナリトノ事第二被告ハ河野広体等ト会議共謀シタルモノニシテ教唆シタルニ非ス然ルニ予審判事ハ何等ノ理由モ付セス被告ヲ教唆者視シ刑法第五條ヲ適用シタルハ不法ノ終結ナルヲ以テ故障ヲ為シタルニ會議局ニ於テハ予審ニ於テ蒐集シタル各証憑ニ依リ明カナリト單一ナル趣意ヲ以テ被告ノ故障ヲ棄却シタルモ若シ其証憑カ之アリトセハ何等ノ事實カ教唆ノ証憑ナリト明カニ之カ説明ヲ為サ、ル可ラス然ルニ毫モ此等ノ理由ヲ弁明セス刑法第五條ヲ適用シタルハ即事実理由ニ齟齬アリ擬律ニ錯誤アル不法ノ言渡シナリトノ事第三予審言渡書第一ヨリ第七條一項ニ至ル犯罪ハ被告ニ於テ闕知セサルヲ以テ被告カ共謀シタル事實ノ証憑毫モアラサルニ刑法第三百七十八條第三百七十九條第三百二十九條等ヲ適用シタル終結言渡ヲ會議局ニ於テ認可シタルハ不法ノ判決ト云ハサルヲ得ス又終結言渡書第五中他ノ被告人カ村田巡查ヲ故殺シ神代警部松井樫村市毛ノ三巡查ヲ傷ケタルカ如キハ河野広体等カ臨時ニ犯セン所為ニシテ被告ニ於テ予知スル所ニアラス然ルニ會議局ニ於テハ被告カ該爆発彈ヲ製造スルヤ已ニ事茲ニ至ルヲ予知シタルハ勿論ナリトノ趣意ヲ以テ故障ヲ棄却セラレタルハ最モ不法ト云ハサルヲ得ス何トナレハ被告カ爆烈彈ヲ製造シタルハ政府顛覆ノ用ニ供スル目的ニシテ故殺ノ用ニ供スル目的ニ非ス況ヤ爆烈彈ヲ製造シタレハ迎人ヲ故殺スルモノニモ非サルニ於テヤ然ルニ會議局ニ於テ刑法第二百九十六條等ヲ適用シタル予審ノ言渡ヲ認可シタルハ事実理由ノ齟齬且擬律錯誤アル不法ノ判決ナリトノ事第四爆発彈ヲ製造シタルハ特ニ強盜ヲ犯スノ用ニ供スル為メ製造シタル者ナリト判定シタルハ事実理由ノ明示ヲ欠キタル不法ノ判決ナリトノ事第五予審言渡書第七第二項ノ所為ハ栃木輕罪裁判所ニ移スヲ至当ナリト信ス他ノ事件ノ如キハ高等法院ノ管轄ニ屬スヘキモノナレハ仮令數罪俱發ニ係ルモ之ヲ栃木重罪裁判所ニ移スノ予審言渡ヲ認可シタルハ不法ノ判決ナルヲ以テ破毀ヲ求ムト言フニ在リ

対手人原檢事柿原義則ハ被告上告ノ趣旨ハ不当ニシテ原會議局判決ハ適當ナリト答弁セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ拠リ立会檢事ノ意見ヲ聽キ判決スル左ノ如シ  
 上告ノ趣旨前掲ノ通ニシテ第一ハ事實ノ理由証憑ヲ弁明セサル不法ノ判決也ト云フニ在ト云ヘトモ其判文ニ依レハ被  
 告カ所為ハ司法警察官及ヒ予審廷ノ訊問ニ對スル被告ノ陳述其他云々其成跡ニヨレハ被告等カ名ヲ国事ニ仮リ強盜ヲ  
 犯シタル云々トアリテ已ニ會議局カ採用スル所ノ証憑ヲ挙示シテ事實ヲ認メタルモノニ付之ヲ事實理由ノ欠缺セルモ  
 ノト云ヲ得ス第二ハ事實理由ノ齟齬擬律錯誤アル不法ノ言渡ナリト云ト雖是亦其判文ニ被告九八郎ハ爆發彈ヲ製造シ  
 之ヲ使用スル事ヲ示シ河野広体等ニ教唆シ惡意ヲ決セシメ琴田岩松外八名ニ交付シタル等ノ事實ハ予審ニ於テ蒐集シ  
 タル各証憑ニ明カナレハ云々トアリテ即會議局カ予審終結言渡ヲ認可セル事實理由ヲ示シタレハ其事實理由ニ齟齬無  
 キハ勿論擬律錯誤ト云コトモ亦非サル也其第三ヨリ第五ニ至ル或ハ擬律錯誤ト云ヒ事實理由ノ明示ヲ欠クト云ヒ又枋  
 木重罪裁判所ニ移スノ予審言渡ヲ認可シタルハ不法也ト云ト雖モ抑事實判官カ各証憑ヲ取捨採択シテ判定シタル事實  
 ニ對シテハ漫ニ侵入スルヲ得サルハ治罪法第四百四十六條第二項ニ掲ケテ明確ナリ而其趣旨タル承審官ノ認定セル事實  
 ノ有無且採証ノ適否ヲ非難スルニ過キサレハ其趣旨ハ總テ相立サルモノトス  
 右ノ理由ナルヲ以治罪法第四百二十七條ニ從ヒ本案上告ヲ棄却スルモノ也

於大審院檢事堀田正忠立会宣告ス

裁判長判事 石井忠恭

專任判事 伴正臣

判事 土師經典

明治十八年六月六日

(2) 宣 告 書

判事 馬屋原二郎  
判事 小林 藹  
書記 渡辺省吾

福島県岩代国耶麻郡米岡

村式百八拾九番地平民

農業六郎長男

三 浦 文 次

明治十八年三月  
二十九年七ヶ月

同県磐城国田村郡三春町

百廿四番地士族適窓弟

無職業

琴 田 岩 松

明治十八年三月  
二十三年一ヶ月

茨城県常陸国真壁郡下館

町三拾四番地土族農業

玉水嘉一

明治十八年三月  
二十六年二月

福島県岩代国耶麻郡下柴

村千五百五番地平民

無職業

原利八

明治十八年三月  
三十四年二月

東京府日本橋区薬研堀町

十九番地平民彦兵衛養子

旅人宿渡世

谷津鉄之助

明治十八年三月  
二十三年四月

右文次外三名カ已ニ犯シタル罪ヲ免カレン為メ巡查ヲ故殺シ鉄之助カ罪ヲ犯シ逃走シ来リタルノ情ヲ知テ富松正安及ヒ玉水嘉一ヲ蔵匿シタル等ノ証憑充分ナルヲ以テ治罪法第二百二十七条及ヒ第三十九条ニ照シ東京重罪裁判所ニ移ストノ予審終結言渡ニ対シ被告五名ハ各故障ヲ申立タルニ付明治十八年四月十一日東京輕罪裁判所會議局ニ於テ強盜犯タルコトノ証拠充分ニシテ国事犯罪ナリトノ証拠ナク到底予審終結言渡ハ相当ニシテ取消スヘキ筋ナキニ因リ之ヲ認



可スト判決シタル処被告共ハ又之ニ服セスシテ上告セリ文次及ヒ岩松ノ要旨ハ時事ニ感慨ノ余大臣參議ヲ殺害シ政府ヲ顛覆セントノ目的ヲ以テ本件ノ所為ニ及ヒシモノニシテ国事犯罪タルノ実績証憑充分明確ナレハ高等法院ノ管轄スヘキ事件ニシテ普通裁判所ノ管理スヘキ所ニ非ス殊ニ被告等カ勝田盛一郎方ニ至リ刀劍ヲ借受ケ朝飯等ヲ喫シタルハ是其承諾上ノ事ニシテ強取強食シタルモノニアラス然ルニ原裁判所會議局ニ於テモ亦本件ヲ強盜犯ナリト認メ国事犯罪ト見ルヘキ証憑ナシト判決シ以テ予審判事ノ言渡ヲ認可セシハ不当ナリト云フニアリ嘉一ノ要点ハ栃木県開庁式ニハ要路ノ官吏モ來臨スト聞キ之ヲ殺害スルノ目的ニテ有為館ヲ発シ途次勝田盛一郎方ニテ食事ノ馳走ヲ受ケ刀劍ヲモ借受ケ国事犯ノ目的ニテ爆発彈ヲ携ヘ加波山ニ潜匿シタル事實ハ明カナルモ決シテ強盜犯ニ非ス強盜犯ニハ爆発彈ヲ要セスト云フニアリ利八ノ訴旨ハ内乱予備ノ所為ニ附和隨行シタル迄ニシテ勝田盛一郎ニ食物ヲ貰ヒ受ケ刀劍ヲ借受ケタルコトハアルモ強盜為シタル覺ヘナキニ原裁判所予審判事及ヒ會議局ニ於テハ只其結果ニ付テ判定ヲ下シ一モ其原因ヲ探ラスシテ強盜犯ナリトシ東京重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シタルハ不法ナリト云フニ在リ鉄之助ノ論趣ハ富松正安ヲ宿泊セシムルニ一般旅人ノ如ク公然取扱ヒタルニ依テ視ルモ其犯罪人タルヲ知テ之ヲ藏匿シタルニ非ルヤ明白ナルニ不実ノ口供ヲ以テ自由任意ノ白狀ナリトシ全ク情ヲ知テ藏匿シタル者ト認定セシハ違法ノ判決ナリト云フニ在リ対手人同裁判所檢事関義幹ハ原判決相当ニシテ上告ノ不理ナル旨ヲ答弁セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告及ヒ立會檢事ノ意見ヲ聴キ之ヲ判決スルコト左ノ如シ凡ソ刑事ノ言渡ニ對シテ上告ヲ為シ得ヘキ場合ハ治罪法第四百十條各項ニ定メタル原由アル時ニ限ルモノニシテ何事モ上訴シ得ルト云フニ非ス就中事實証憑ノ取捨判定ニ至テハ同法第四百十六條第二項ノ明文ヲ以テ特ニ之ヲ承審官ノ職權ニ委任セシモノナレハ叨リニ之カ当否ヲ論シテ上告原由ト為スヲ得ス今被告五名ノ上告旨趣ヲ案スルニ其訟フル所ハ各小差ナキニ非スト雖トモ

要スルニ各自ノ事実トスル所ヲ採テ原判定ヲ非難シ以テ之カ覆審ヲ要ムルニ過サレハ之ヲ採用スルコト能ハス何トナレハ治罪法第四百十條ノ規定外ニ渉ルノ訴旨ナルヲ以テナリ然ラハ則チ上告ノ理由ナキニ付同法第四百二十七條ノ成規ニ則リ本案上告ハ都テ之ヲ棄却スル者也

於大審院檢事川目亨一立會宣告ス

明治十八年六月廿九日

裁判長判事 伴 正 臣

專任判事 石 井 忠 恭

判事 土 師 經 典

判事 馬 屋 原 二 郎

判事 小 林 藹

書記 岩 田 鍊

(3) 宣 告 書

茨城県常陸国真壁郡下館町

四番地主族無職業

富 松 正 安

明治十八年四月  
三十八年

明治十八年四月廿三日千葉輕罪裁判所會議局ニ於テ右富松正安カ強盜及ヒ故殺被告事件ノ予審終結言渡ニ對スル故障ヲ審理シ被告カ故障ノ趣意相立サルヲ以テ予審終結言渡ヲ認可スト言渡シタル判決ニ服セス被告正安ハ上告ヲ為シタリ其要領ハ第一予審終結言渡書中第一第五第六項ノ事實ハ未タ以テ理由ヲ尽シタル者ニアラス就中第五項ノ事柄ノ如キハ只漫然被告其他ノ共犯等ハ云々ト十六名ノ人員ヲ掲記シ置キタルノミニテ何人乎遂ニ之ヲ殺シタルカラ判示セス乃チ理由ヲ明示セサル違法ノ判決タルヲ免カレサルモノナルニ原會議局ノ判文ニ唯タ（予審終結言渡書中第一第五第六項ニ於テ被告ハ其事ヲ共ニ与ニシタルコトヲ認メ刑法第四百條ヲ掲ケテ以テ其正犯タルコトヲ明示シ）トノミ掲ケ以テ其不法ヲ回護セラレタルカ如キハ益々以テ不法ニ陥リタル者ナリ何トナレハ右第四百條ハ其明文ノ如ク二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ニシテ始メテ正犯タル可キ者ナルニ上告人ヲ始メ十六名ノ者カ現ニ罪ヲ犯シタリト云フハ右第一第五第六ノ点ニ就テハ何ヲ指スカ彼ノ村田常儀ノ死ノ如キハ現ニ何人ノ犯シタル罪ナルカ之ヲ右第四百條ニ照ストキハ益其判決ノ不当ナルヲ知ルヘケレハナリ依テ原判決ハ治罪法第四百十條第九ノ所謂理由ヲ付セサル者又僅ニ付シタルノ理由ハ前陳ノ如ク齟齬アル者ナレハ到底其當ヲ得サル者ト信ス第二予審終結言渡書ヲ視ルニ其第二第三第四項ニ於テハ正安ハ只加波山ニ居リトノミアリテ毫モ教唆指示ノ事實ヲ掲ケス乃チ三浦文治外九名ハ各其意ヲ以テ運動シタル者ナルニ原會議局ニ於テハ其判文ニ（被告自ラ行カサルモ其共謀者ヲ行カシメタルコトヲ認メ云々）ト乃チ予審中ニ嘗テ之レアラサルノ語ヲ新タニ作り出シテ予審終結ハ不当ニアラスト判決セラレタルカ如キハ全ク其理由ノ齟齬シタル者ナリ第三予審終結言渡書中第一第二第四第六項ニ事實ナリトシテ掲クル尨ハ只其一班ノ模樣ヲ記シタルノミニシテ其本旨即チ被告事件ノ情態ト起因トヲ明ニセスシテ直チニ刑法第三百七十八條同第三百七十九條等ヲ擬シタルモ

ノナレハ決シテ事實ニ適當シタル擬律ト云フ能ハス証憑ノ取捨ハ固ヨリ裁判官ノ判定ニ任セラレタリト雖モ既ニ其採定セラレタル証憑ニ依リ事實強盜ト称スヘキ者ニアラサルコト明白ナルニ却テ之レニ強盜ノ法律ヲ擬スルカ如キニ至リテハ其不当ナルコト証憑ノ取捨ニ存セルニ非シテ其事實ト法律トニ就キ理由ヲ明示セサルト擬律ニ錯誤アルトニ在ルモノナリ然ルニ原會議局ニ於テ其判文ニ（証憑ノ取捨ハ一ニ裁判官ノ判定ニ任セタルモノニシテ云々）ト掲ケ乃チ強盜故殺教唆ノ事實ヲ認メタルモノナレハ不当ニアラストシ違法ノ予審終結言渡ヲ回護セラレタルハ是レ即チ治罪法第四百十條第九第十十一ニ適合スル不法ノ判決ナリ第四本按被告事件ハ単ニ政治上ノ意見ノ異ナルニ出テ、空シク事機ヲ失シタルニ因リ其目的ヲ達セントシテ所為ノ茲ニ至リタルモノトスレハ尋常故殺ニ非サルコト明白ニシテ全ク刑法第二編第二章第一節ニ記載シタル重罪ナルコト勿論ナルカ故ニ治罪法第八十三條ニ依リ当ニ高等法院ノ管轄ニ屬スヘキモノナリ又暫ク普通ノ輕重罪ナリトスルモ治罪法第四十條及ヒ明治十四年第四十六号布告第二項ニ照ストキハ予審終了ノ後チ其犯罪ノ地及ヒ重輕罪タルコト判然シ管轄裁判所ヨリ囑托アリタル時始メテ逮捕地ノ裁判所ニ於テ之ヲ管轄スヘキモノナルニ予審係ノ処分此ニ出ス其終結言渡書ニ犯罪ノ地ハ茨城県下常陸国ナルコトヲ判示シナカラ其囑托ニ依リ千葉重罪裁判所ヘ移シタルニアラスシテ当然千葉重罪裁判所ヘ移スノ言渡ヲナシタルカ如キハ即チ治罪法第四十條ノ法律ヲ犯シタル者ニシテ乃チ被告事件ノ性質ニ依ルモ又予審掛ノ認メタル犯罪ノ地ニ随フモ共ニ管轄違ノ判決タルヲ免カレサルモノナルニ原會議局ニ於テ此不当ノ言渡ヲ認可シタルハ取リモ直サス同第四百十條第二及ヒ第三ニ適合スル不法ノ判決ナリト云フニ外ナラス原裁判所檢事補山本辰六郎ハ原判決允當ニシテ被告ノ上告ハ一モ治罪法第四百十條ノ各項ニ適合スル原由ナキヲ以テ速ニ棄却アルヘキモノト確信スル旨答弁セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告並ニ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スル左ノ如シ

上告第一乃至第三論旨ハ原判決ハ事実ト法律トニ就キ理由ヲ明示セス且其理由ニ齟齬アリ擬律ノ錯誤アル等ニシテ即チ治罪法第四百十條第九第十十一ニ適合スルモノナリト云フニアレトモ原判決ヲ監査スルニ被告カ故障ノ旨趣ニ對シ一々弁明ヲ与ヘ且其予審終結言渡ノ不当ナキ理由ヲ明示シ遺スル所ナク而シテ其理由ノ齟齬アルヲ見サルハ勿論其擬律ノ錯誤アリトノ論點ノ如キハ自ラ尋常ノ強盜又ハ故殺ニアラスト主張スルニアリテ乃チ単ニ事實ノ認定ヲ動カサシコトヲ試ムルニ過サルヲ以テ原會議局ハ故障ノ理由ナシト判決ヲ与ヘタルモノナレハ決シテ右第四百十條第九第十十一ニ適合スル瑕瑾ナク而シテ又其第四論旨ノ如キモ被告カ自ラ内乱ノ目的ニ出シ所為ナリト主張スルマテニテ原裁判所ハ其事實ヲ認メサル上ハ高等法院ノ管轄ニ屬スヘキモノニアラサルハ勿論已ニ普通裁判所ノ管轄スヘキモノナル上ハ明治十四年第四十六号布告ニ基キ逮捕ノ地ノ裁判所ヘ起訴シタルモノナレハ予審掛ニ於テ之ヲ其逮捕ノ地即チ千葉重罪裁判所ニ移スノ言渡シヲ為シタルハ固ヨリ当然ノ処分ニシテ原會議局ニ於テ之ヲ認可シタルハ毫モ不法ニアラストス依テ原判決ハ破毀スヘキ原由ナキヲ以テ本按上告ハ之ヲ棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事川目亨一立會宣告ス

裁判長判事 石井忠恭 ㊦

專任判事 北村泰一 ㊦

判事 伴正臣 ㊦

判事 土師經典 ㊦

判事 馬屋原二郎 ㊦

明治十八年八月十八日

書記 片山保和 印

(4) 宣 告 書

茨城県常陸国真壁郡

下館町四番地士族

富 松 正 安

明治十八年十月  
三十八年六ヶ月

右富松正安カ為シタル裁判管轄違ノ申立ニ対シ明治十八年十月十六日千葉重罪裁判所ニ於テ被告人逮捕ノ地ナル千葉  
軽罪裁判所ハ明治十四年第四十六号公布ニ遵ヒ其犯罪地ノ裁判所ヨリ囑託アリタルヲ以テ之ヲ管轄シ而シテ千葉重罪  
裁判所カ管轄スルハ正当ナリ又明治十四年第四十六号公布ニ依リ逮捕地ノ裁判所ニ於テ囑託ヲ受ケタルトキハ予審公  
判共ニ同一逮捕地ノ裁判所カ管轄スヘキハ勿論ナルヲ以テ千葉重罪裁判所ハ別ニ囑託ヲ要セスシテ被告ノ公判ニ付正  
当ノ管轄裁判所ナリ因テ被告カ管轄違ノ申立ハ棄却スト言渡シタル判決ニ服セス被告正安カ上告シテ破棄ヲ求ムル要  
領ハ原裁判所ハ第一論旨ノ要点タル数多ノ被告人数多ノ裁判所ノ管轄ニ属スル事項ニ対シテハ毫モ判決ヲ与ヘサルノ  
ミナラス被告カ予審又ハ公判ニ付セラレタルハ同事件ニ付正犯ト認メラレタル河野広躰等カ東京栃木等ニ於テ予審又  
ハ公判ニ付セラレタル後ニアルハ明白ナレハ治罪法第四十四条二項ニ随ヒ最初予審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以  
テ其管轄トスヘキハ我法律ノ明定スル所ナルニ法律ニ背キ原裁判所ノ管轄ナリト言渡シタルハ不当ナリ又明治十四年

第四十六号布告ニハ管轄裁判所ヨリ囑託アリタルトキハ云々トアリテ其文義明白ナレハ予審ニ付管轄裁判所ヨリ囑託アルヤ逮捕地ノ輕罪裁判所ノ管轄タルヘシト雖トモ未タ囑託ヲ受ケサル他ノ裁判所〔即チ本件ニ付テハ千葉重罪裁判所〕カ為メニ其管轄ヲ広クスルノ理万々アルヘカラサレハ原裁判所カ被告人ヲ管轄スルニハ犯罪地ノ重罪裁判所ノ囑託ヲ要スルヤ勿論ナルニ〔法律ノ精神ニ於ケル地ニ付テノ管轄ハ予審ト公判トヲ同一地ノ裁判所ニ屬シ云々〕ト法理ニ背ケル見解ヲ下シ本按事件ハ其管轄ナリト言渡シタルハ不当ナリト云フニアリ

対手人檢事補山本辰六郎ハ被告ノ上告ハ其理由ナキニ付速ニ棄却アリタキ旨ノ答弁ヲ為シタリ

本院ニ於テ治罪法第四百二十五条ノ式ヲ踐行シタルニ代言人松尾清次郎ハ上告趣旨ヲ詳陳シ且明治十四年第四十六号公布ハ専ラ治罪法第四十条ニ付頒布セラレタルモノナレハ同法第四十一条以下ノ規則ニ対シテハ効力ナキモノト信スル旨ヲ陳述シ檢事堀田正忠ハ原判決ハ適當ニシテ上告論旨ハ其理由ナキノミナラス裁判管轄ヲ規定セル総則トモ云フベキ治罪法第四十条ニ付該公布アリタル以上ハ同法第四十一条以下自ラ其影響ヲ受クルハ勿論ニ付原裁判所カ被告人ヲ管轄スルハ当然ト思量スル旨ノ意見ヲ述ヘタリ

因テ判決スルニ明治十四年第四十六号公布第二項ハ治罪法第四十条ノ規則ニ付其範圍ヲ広メタル便法ナルモ裁判管轄ヲ規定セル原則タル同条ニ付此法アルヤ其効ハ同条ニ止マラスシテ同法第四十一条以下ニ及フハ自然ノ理勢ナルヲ以テ數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル場合ト雖モ其幾名ヲ分チ犯罪地ノ裁判所ハ之ヲ囑託シ逮捕地ノ裁判所ハ其囑託ヲ受ケ之ヲ管轄シ得ルハ論ヲ俟タサル所ナリトス又逮捕地ノ輕罪裁判所カ犯罪地ノ裁判所ヨリ囑託アリタルニヨリ正犯數名中ノ幾名ヲ管轄シ而シテ之ヲ移スヘキ正当ノ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シ重罪裁判所ハ其言渡ニヨリ当然之ヲ管轄スルニ於テハ別段犯罪地重罪裁判所ノ囑託ヲ要セサルモノトス何トナレハ予審判事ハ元ト其管轄外ノ裁

判所ニ被告事件ヲ移スヲ得サルカ故ニ予審ノ囑託ハ遂ニ其効ナキニ至レハナリ然レハ千葉輕罪裁判所カ犯罪地ノ裁判所ヨリ囑託アリタルニヨリ被告人ヲ分割管轄シ之ヲ千葉重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シタルト該重罪裁判所カ其言渡ニヨリ之ヲ管轄スルトハ共ニ不法ニ非サルニ付該重罪裁判所カ管轄違ノ申立ヲ棄却シタルハ其当ヲ得タルノミナラス原判決ヲ監査スルニ申立タル条件ニ付判決ヲ為サ、ル等ノ瑕瑾アルヲ見サルモノトス右ノ如クナルヲ以テ上告論旨ハ總テ不相立者トシ治罪法第四百二十七条ニ依リ本件上告ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立会宣告ス

裁判長判事 河口 定義

専任判事 荒木 博臣

明治十八年十一月三十日

判事 武久 昌孚

判事 安居 修蔵

判事 奥山 政敬

書記 田辺 権

(5) 宣 告 書

愛知県三河国碧海郡野田村



二百二十二番地士族農業

小林篤太郎

明治十八年九月  
十九年三ヶ月

茨城県常陸国真壁郡下館町

士族無職業

保田駒吉

明治十八年九月  
二十三年十一月

右篤太郎外一名カ被告事件ニ付被告二名ヨリ管轄違ノ申立ヲ為シタルニ因リ明治十八年九月二十八日甲府重罪裁判所ニ於テ同裁判所カ本件ヲ管轄スルハ当然ナルニ付此申立ハ棄却スト言渡シタルニ被告二名ハ之ニ服セスシテ各上告セリ其旨趣ハ聊カ少差ナキニ非サルモ要スルニ本件数多ノ正犯中最初予審公判ニ着手シタル裁判所ハ東京ナルカ故ニ治罪法第四十四条第二項ニ依リ被告二名モ亦東京重罪裁判所ノ管轄ニ歸スヘキモノニシテ明治十四年第四十六号布告ハ数多ノ正犯ヲ分轄スルノ旨趣ニ非サレハ本件ノ如キ場合ニ適用スヘキモノニアラス然ルニ原裁判所於テ其管轄ナリト言渡シタルハ不法ナリト云フニ外ナラス対手人同裁判所検事長谷川秀実ハ上告ノ理由ナキ旨答弁セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五条ノ法式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告ノ旨趣ハ被告事件ハ治罪法第四十四条第二項ニ依リ東京重罪裁判所ノ管轄ニ歸スヘキ者ナリト云フト雖モ本按ノ如キハ原裁判所へ囑託アリタルモノナレハ原裁判所於テ明治十四年第四十六号布告ニ依リ本件ヲ管轄スルハ固ヨリ当然ナリトス然ラハ則チ上告論旨相立サルニ付治罪法第四百二十七条ノ規則ニ從ヒ之ヲ棄却スル者也

於大審院檢事堀田正忠立会宣告ス

明治十八年十一月三十日

裁判長判事 伴 正臣 印

専任判事 石井忠恭 印

判事 北村泰一 印

判事 土師經典 印

判事 馬屋原二郎 印

書記 岩田 鍊 印

(6) 宣 告 書

福島県岩代国耶麻郡塩川村

千八百二十四番地同居士族

横 山 信 六

明治十八年九月  
二十二年九ヶ月

同県同国北会津郡若松徒ノ

町六十四番地和田求二方同

居士族

門 奈 茂 次 郎

同年同月  
二十四年九ヶ月

同県同国耶麻郡米岡村二百

八十九番地平民農六郎長男

三 浦 文 次

同年同月  
三十年一ヶ月

同県磐城国西白川郡中畑新

田村字西浦九十四番地平民

農鎮平長男

小 針 重 雄

同年同月  
二十一年三ヶ月

同県同国田村郡三春町

百弍十四番地士族

琴 田 岩 松

同年同月  
二十三年七ヶ月

同県同国磐城郡中神谷村字

石脇十七番地士族克孝弟

草野左久馬

同年同月  
十九年九ヶ月

同県同国田村郡三春町

八十一番地主族

五十川元吉

同年同月  
二十年一ヶ月

茨城県常陸国真壁郡下館町

三十四番地主族

玉水嘉一

同年同月  
二十六年四ヶ月

福島県岩代国耶麻郡下柴村

千五百五番地平民

原利八

同年同月  
二十四年八ヶ月

愛知県三河国碧海郡上重原村

二百二十一番地主族

内藤魯一

同年同月  
三十九年

明治十八年九月廿一日東京重罪裁判所ニ於テ右信六外九名カ被告事件管轄違ノ申立ヲ審理シ本件被告事件ニ付最初予  
審ノ処分ニ着手シタルハ門奈茂次郎ニシテ明治十七年九月十一日ニアリ而シテ鯉沼九八郎等カ予審ニ着手セラレタル  
ハ其以後ニ係レハ当重罪裁判所ニ於テ本件ヲ管轄スルハ正当ナルヲ以テ其正当管轄ノ下ニアル被告等ニ於テ管轄違ナ  
リトノ申立ハ難相立依テ其管轄違ノ申立ハ之ヲ棄却スト言渡シタル判決ニ對シ被告信六外九名ハ上告ヲ為シタリ其要  
領ハ抑被告等カ管轄違ヲ申立タル旨趣ハ本件ノ如ク数名ノ共犯アル場合ハ併セテ一箇ノ裁判所ニ於テ管轄ス可キコト  
ハ法ノ命スル処ニシテ其之ヲ分轄シ得ルノ法許ナキ上ハ數箇ノ裁判所ニ於テ分轄審判ス可キモノニアラスト云フニア  
リシヲ以テ原裁判所ハ宜ク治罪法ノ規定ニ則リ其要点ニ對シ明ラカニ理由ヲ示シ相當ノ判定ヲ与ヘラルヘキハ当然ナ  
ルニ其茲ニ出スシテ只予審着手ノ前後ヲ示シタルニ止メ緊要ノ理由ヲ示サ、リシハ全ク事實理由ノ不備アル判決ニシ  
テ即チ治罪法第四百十條第九項ニ適合スル破毀ノ原由アルモノナリ又數名ノ共犯者アル場合ハ之レヲ分轄シテ審判ス  
可カラサルコトハ治罪法第四十四條第二項ニ規定スル処ニシテ乃チ訴訟ハ分轄ス可カラストノ原理ニ出テタルモノナ  
リ而シテ其分轄ス可カラサル理由ハ共犯者ノ所為ハ異身同躰ト看做ス可ク又各犯ノ罪狀ハ事情百端ナレハ渾テ之ヲ親  
訊スルニ非サレハ事實ノ發見ヲ妨ケ從フテ刑ノ適施<sup>(ママ)</sup>ヲ得可カラス且治罪法ハ刑法ト相待テ効用ヲ為ス者ナリ故ニ之ヲ  
分轄スル時ハ刑法第四十七條ニ示ス場合ノ如キ之ヲ實施スルコト能ハサルカ為メニシテ而シテ本件ノ如キハ乃チ右法  
章ニ該當スル共犯罪ナレハ之ヲ相當ノ裁判所ニ包括シテ管轄ス可キハ當然ナルニ原裁判所ハ各被告人ヲ分轄シアルニ  
モ拘ハラズ最初門奈茂次郎カ予審ニ着手セントノ事項ノミニ拘泥シ正当ノ管轄ナリト判定セシハ治罪法第四百十條第  
三項ニ適合スル破毀ノ原由アルモノナリト云フニ在リ

原裁判所検事加納謙ハ原判決允当ニシテ被告等ノ上告ハ其理由ナキヲ以テ速ニ棄却ノ言渡アルヘキモノト思料スル旨答弁セリ大審院ニ於テ治罪法第四百二十五条ノ公式ヲ踐行スルニ被告重雄ヲ除クノ外信六外八名ノ上告代言人山田泰造松尾清次郎中島又五郎〔大井憲太郎  
代人兼〕武藤直中ハ各其上告趣意ヲ弁疏シ且擴張シテ曰ク第一原檢察官答弁書第二段ニ況ヤ共犯者ハ囑託法ニ依リ逮捕ノ地ノ裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルニ於テヲヤトアルハ全ク原裁判所ノ未タ判決セサル事項ニ論及シタルモノナルノミナラス其囑託法トアルハ蓋明治十四年第四十六号布告ヲ指摘シタルモノナラン果シテ然ラハ該布告ノ効用ヲ誤解シタルモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ該布告ハ治罪法第四十条ノ場合ニ限ル一ノ便宜法即チ變則ニ過サルコトハ其文詞中明条ヲ掲記シアリテ明ラカナレハ本件ノ如ク同第四十四条第二項ノ正条ニ該当スルモノニ引用シ得ヘキニアラサレハナリ第二被告魯一ノ如キハ他ノ裁判所ノ審理中ニ係ル小林篤太郎ヲ藏匿シタル附帯犯ナレハ其本犯ト共ニ審判セラルヘキモノニシテ独リ分離シテ原裁判所ノ管轄セラルヘキモノニアラスト立会検事安藤源五郎ハ本按上告論旨ハ勿論代言人ノ擴張論モ共ニ其理由ナキヲ以テ棄却アランコトヲ望ムトノ意見ヲ陳述セリ依テ之ヲ判決スルコト左ノ如シ

本訴ハ管轄違ノ申立ナルヲ以テ其要点ハ原裁判所ハ被告等ヲ正当ニ管轄シ得ヘキヤ否ヤヲ判決スルニ在リ爰ヲ以テ原裁判所ハ右ノ要点ニ対シ最初予審ニ着手シタルノ理由ヲ示シ被告等ヲ正当ニ管轄スヘキハ即チ原裁判所ナルコトヲ判決シタレハ原裁判所ハ決シテ訴件ノ要点ニ対シ判決ヲ与ヘサルモノニ非ス然ルニ被告等ニ於テ原裁判所ハ分ツテ管轄スルヲ得ルヤ否ヤノ点ニ対シ其理由ヲ付セサルハ不法ナリト云フト雖トモ凡ソ裁判所ニ於テ原被告ヨリ申立ル所ノ訴点ノ理由ニ対シ之レカ弁明ヲ与フルモノハ畢竟其訴件ノ要点ヲ判決センカ為メニシテ其理由ノ当否ヲ判決センカ為メニ非ス故ニ既ニ其要点ヲ判了シタル上ハ其理由ニ対シ一々之レカ弁明ヲ与フルヲ要セサルモノトス況ンヤ原裁判所カ

既ニ被告等ヲ正当ニ管轄スヘキハ同裁判所ニ在ルコトヲ判決シタル上ハ從テ其共犯者ヲ分離スヘカラストノ論旨ノ如キハ以テ管轄違ヲ申立ルノ論拠ト為スヘキニアラサルコトハ亦弁ヲ俟タスシテ之ヲ知り得ヘキモノナルニ於テヲヤ如何トナレハ凡ソ管轄違ノ申立ハ其管轄ヲ受クヘカラサルモノ、為スヘキモノニシテ正当管轄ノ下ニ立ツモノ、為スヘキモノニアラサレハナリ依テ被告等カ原裁判ハ治罪法第四百十條第三第九ニ適スル不法アリトノ上告ハ其理由ナキモノトス而シテ又代言人等カ擴張第一論旨ノ如キモ是又上告ノ原由トナシ難シ何トナレハ原裁判所カ被告等ヲ管轄スヘキ正当ノ場所タルニ於テハ原檢察官ノ答弁ハ暫ク不当アルモノトスルモ之レカ為メ原判決ニ影響ヲ及ホス理ナケレハナリ況ンヤ明治十四年第四十六号布告文中ニ治罪法第四十條ヲ明記セシハ畢竟該條ハ犯罪者ノ管轄ヲ規定シタル原則ナルカ為メニ過キサレハ其管轄ノコトニ付該布告ヲ引用シ得ヘキ他ノ支節ノ條項ニ引用スルノ妨ケトナラサルハ勿論其布告中共犯者ヲ分轄シテ嘱托スルコトヲ禁シタル文詞ナキ限りハ同第四十四條第二項ノ場合ニモ亦當然之ヲ引用シ得ヘキモノトス若シ然ラスシテ該布告ハ同第四十條ノ場合ニ限ルモノトスルトキハ例令ハ同第四十二條ノ場合ニアリテハ該布告ノアルニモ拘ハラズ逮捕シタル被告人ハ必ス最近ノ裁判所ニ送致セサルヲ得サルノ不便ヲ生シ遂ニ該布告ノ効用全タカラサルニ至ル可ケレハナリ由是觀之ハ右第四十六号布告ノ効用論ニ至リテハ却テ代言人等カ自ラ説ヲ誤リタルコト明ラカナルニ於テヲヤ又第二論旨ノ如キ上來弁明ノ如ク本件ヲ正当ニ管轄スヘキハ全ク原裁判所ニアルモノナレハ小林篤太郎カ其管轄内ニ在ルハ固ヨリ論ナク代言人カ同人ノ附帯犯ナリト云ヘル被告魯一ノ如キモ亦タ從テ其管轄内ニアルモノトス然リ而シテ其内篤太郎ノ如キハ右第四十六号ノ特別法ニ依リ他ノ裁判所ニ分轄セラレタルモノニシテ且ツ該布告ハ其正從犯スラ共ニ之ヲ分別嘱托シ得ヘキコト前弁明ノ如クナルカラハ其本犯ト附帯犯ノ場合ニモ之ヲ適用シ得ヘキコト亦論ヲ俟タサルヲ以テ其分轄セラレスシテ殘ル被告人ハ其魯一タルト誰タルヲ問ハス皆原裁

判所カ正当ニ之ヲ管轄スヘキモノナリトス依テ代言人カ擴張論旨モ亦相立サルモノトス  
以上弁明ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七条ニ従ヒ本按上告ハ之ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事安藤源五郎立会宣告ス

專任判事 安居修藏

判事 河口定義

判事 北村泰一

判事 奥山政敬

書記 大津義一郎

明治十八年十一月三十日

(7) 宣 告 書

東京芝区田町四丁目平民

河野雪崑次男

河野 広 躰

明治十八年九月  
二十年九月

福島県磐城国田村郡三春町



士族

天野市太郎

明治十八年九月  
十八年七ヶ月

栃木県下野国下都賀郡

下稻葉村平民

鯉沼九八郎

明治十八年九月  
三十一年十ヶ月

福島県磐城国行方郡

岡和田村士族

杉浦吉副

明治十八年九月  
三十八年十ヶ月

右四名カ強盜故殺被告事件ニ付栃木重罪裁判所ニ於テ公判中管轄違ノ申立ニ対シ明治十八年九月十九日審理ノ末広鉢市太郎九八郎ハ明治十四年第四十六号公布ニヨリ管轄裁判所檢事ヨリ囑託アリタルヲ以テ当重罪裁判所ノ管轄ナリトシ吉副ハ強盜故殺犯ノ事跡アルモノ内乱ヲ起スノ目的ニ原因セシモノト認ムルニ由ナキヲ以テ治罪法第三十八条第三項ニ照シ当庁ノ管轄ニ属スルモノトシ該申立ハ総テ棄却スト言渡ヲナシタリ被告河野広鉢天野市太郎鯉沼九八郎杉浦吉副ハ右ノ言渡ヲ不法ナリトシ上告スル要領タル広鉢市太郎九八郎ニ於テ本件ハ強盜故殺犯ノ罪名ヲ以テ公訴ヲ提起セラレ尚ホ他ニ附帶ノ被告人数名アルヲ東京甲府千葉数個ノ重罪裁判所ニ分割セラレタルモ治罪法第三十八条第三十九

条ニヨレハ分割スヘカラサルモノナリ而シテ之カ法理ヲ挙ルニ分割スルトキハ共犯者ノ供述自ラ齟齬シ事実発見上不便ヲ生シ其結果法律ノ平等ヲ保ツ能ハサルニ至ラン故ニ一ノ裁判所ニ於テ附帯ノ被告人ヲ理スルコトヲ要求スル所以ナリ又同条以下ニ参照セハ第四十四条第一項ニ從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ管轄ナリトストアリテ法理上必ス分割スヘカラサルモノトシ一括シテ理スヘキ裁判所ハ正犯ノ場所即チ茨城重罪裁判所ノ管轄スルヲ当然ナリト申立タルニ原裁判所ハ明治十四年第四十六号公布ニヨリ管轄裁判所檢事ノ囑託アリタルヲ以テ当庁ノ管轄ナリトシ被告等ノ申立ヲ棄却セシモ該公布ハ治罪法第四十条第二項ニ對シ当分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタルトキハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘント反對ノ告示セラレタルニ止リ同法第三十八条第三十九条ヲ變更シタルモノニ非サルコト瞭然タリ然ルニ原裁判所ハ第一ノ要領トシテ申立タル分轄スヘカラサル理由ニ付裁判ヲ与ヘス単ニ囑託ニヨリ当庁ノ管轄ナリト裁判セシハ治罪法第四百十条第七項ニ背戾セシモノナリ若シ該公布ヲ以テ分割スヘキモノトノ趣旨ヲモ併セ判決セシモノトセハ分割スヘカラサル法律ニ背キ同法第四百十一条ニ抵触スル不法ノ裁判ナリト破毀ヲ請求シ尚ホ市太郎ハ追伸書ヲ以テ檢察官ノ答弁ヲ駁シ前意ヲ敷衍セリ吉副ニ於テハ被告カ犯罪ノ目的タル政府ノ政略ニ不滿ヲ抱キ革命ヲ行ハント同志ヲ募リ又ハ内乱ヲ起サント爆裂彈ヲ製造シ兵器金穀ヲ劫掠シタルモノニテ国事犯ナル証憑顯然ナレハ高等法院ノ管轄ニ屬スヘキモノトシ管轄違ノ申立ヲナシタルニ原裁判所ハ確適ナル証拠ニ對シ単ニ国事犯ニ関スル証憑ナシトシ棄却ノ言渡シヲナシタルハ越權ノ処分ナルノミナラス事實ノ理由ヲ附セサル不法ノ裁判ナリト破毀ヲ要請シ尚ホ弁明書ヲ以テ原檢察官ノ答弁ヲ駁シ証拠ノ取捨權ハ裁判官ニアリト雖モ本件ノ如キ九八郎宛ノ電報ニヨルモ政体ノ改革ヲ企図シタルコト明カナルニ其採択ヲ誤リ証ナシタルハ越權ナリ又共犯人河野広躰等カ犯罪地ヲ以テ裁判管轄ナリトノ申立ヲナシタレハ常事犯ナリトセシモ個ハ同人等ノ思想マテニ

テ国事犯ニ非スト明言シタルニ非サレハ被告カ常事犯タルノ証憑トスルニ足ラスト云フニアリ  
対手人検事柿原義則ハ被告人等カ上告趣旨ノ不当ナル旨逐一論駁シ速ニ棄却アラシコトヲ求ムト答弁セリ  
大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニヨリ広躰市太郎九八郎ノ上告代言人渡辺小太郎ハ明治十八年十月二十六日付弁論書ノ  
取消ヲ求メ而シテ上告趣旨ヲ弁明シ明治十四年第四十六号公布ハ単ニ治罪法第四十条ノ取除法ニテ其他ノ法条ニ及ホ  
サ、ルモノナレハ本件ハ同法第三十八条第三十九条ニヨリ裁判管轄ヲ分ツヘカラサルモノトノ理由ヲ敷衍セリ吉副カ  
代言人仁杉英ハ上告趣旨ヲ弁明シ治罪法第三十八条ハ三項ナキニ第三項ニヨリトセシハ不法ノ裁判ナリ仮ニ常事犯ト  
スルモ栃木重罪裁判所ノ管轄ニ非サルコト広躰等カ上告趣旨ト同一ナル旨擴張論告セリ因テ立会検事ノ意見ヲ聴キ茲  
ニ之ヲ審按スルニ治罪法第三十八条ハ犯罪ノ種類ニ付裁判管轄ヲ定メ其第二項ハ重罪輕罪又ハ違警罪ニ付同時ニ同一  
ノ被告人ニ対シ訴ヲ受ケタルトキハ上等ノ裁判所併セ管轄ストノ規則ニシテ同第三十九条ハ附帯犯罪ト称スヘキモノ  
、場合ヲ示シタルモノニテ本件ノ如キ場合ニ適用スヘキ法条ニ非ス又明治十四年第四十六号公布タル治罪法第四十条  
ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候処当分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑托アリタルトキ  
ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシト規定シタル法条ニシテ被告人一名タルト数名タルト正從犯アルトキト  
ノ明文ナケレハ数名ノ共犯者各所ニ於テ逮捕セラレタル場合ト否トニ論ナク其犯罪地ノ管轄裁判所ヨリ囑托アリタル  
トキハ各逮捕地ノ裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルハ素ヨリ当然ナリトス故ニ原裁判所カ被告人等ニ於テ本按ハ治罪法第三  
十八条以下ノ規則ニ從ヒ云々ト申立ルト雖モ明治十四年第四十六号公布ニヨリ管轄裁判所検事ヨリ囑托アリタルヲ以  
テ当重罪裁判所ノ管轄ナリト言渡シタルハ即チ治罪法第三十八条第三十九条ニヨルヘキモノニ非ストノ意義ヲ包含シ  
被告等カ申立タル点ニ付判決ヲ与ヘサルモノニ非ス又分轄スヘカラストノ規則ニ背キタル廉ナク相当ノ言渡ナレハ広

躰市太郎九八郎ノ上告及ヒ代言人ノ論告ハ相立ス吉副カ上告ノ理由ハ国事犯ノ証憑充分ナルニ之カ説明ヲナサス国事犯ニ関スル証憑ナシトシ却テ他人ノ申立ヲ採テ常事犯ノ証トシタルハ不法ナリト云フニアルモ証拠ノ取捨ハ事實裁判官ノ権内ニシテ他ヨリ容喙シ得ヘキモノニ非ス而シテ這ハ本按事件ノ裁判言渡ニ非ス管轄違ノ申立ニ対スル言渡ナルヲ以テ原判官カ現況ニ付認ムル所ニヨリ強盜故殺等ノ事跡アルモ内乱ヲ起スノ目的ニ原因セシヤヲ認ムルニ由ナキノミナラス共犯人河野広躰外二名カ管轄違ノ申立ニヨルモ常事犯ナルコト明カナリト判決シタルモノニテ他人ノ申立ハ僅カニ心証ノ助ケトナシタルニ止リ専ラ之ヲ以テ国事犯ノ証ナシトシタルニ非ス又被告一己ノ思想ヲ以テ証トスルモノニ対シ其理由ヲ説明スヘキモノニ非サレハ原裁判ハ毫モ理由ノ不備又ハ越権ノ処分アルコトナシ又代言人ハ治罪法第三十八条第三項ニヨリトセシハ不法ノ裁判ト云フモ原裁判所ハ同条第三ノ目ニヨリタルコト明知スヘケレハ是等ヲ以テ不法ト云フヘキモノニ非ス其他仮ニ常事犯トスルモ云々トノ点ハ前段広躰外二名ノ上告ニ対シ与ヘタル弁明ノ理由ト同一ナレハ共ニ相立サルモノト判定ス

以上ノ如クナルヲ以テ本件上告ハ治罪法第四百二十七条ニヨリ総テ之ヲ棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立会宣告ス

裁判長判事 荒木博臣

専任判事 河口定義

判事 武久昌孚

判事 安居脩蔵

明治十八年十一月三十日

判事 奥山政敬  
書記 石坂義雄

(8) 宣 告 書

福島県磐城国行方郡

岡和田士族

杉浦吉副

明治十八年九月  
三十八年十ヶ月

右吉副カ被告事件ノ公判中管轄違ノ申立ニ付栃木重罪裁判所<sup>(マコ)</sup>於テ言渡シタル判決ヲ不服ナリトノ上告ニ対シ明治十八年十一月三十日大審院ニ於テ審理ノ末上告理由ナキモノトシ棄却ノ裁判ヲナシタリ被告吉副カ上告代言人仁杉英ハ右裁判ニ対シ哀訴ヲナシタリ其要領タル本件上告及ヒ代言人拡張趣旨ハ三点ニシテ其第一第二ニ対シテハ判決ヲ下サレタルモ第三仮令常事犯ナリトスルモ猶原裁判ハ管轄違ナリトノ点ニ付判決ヲ下サレス勿論判決文中仮ニ常事犯トスルモ云々トノ点ハ前段広躰外二名ノ上告ニ対シ与ヘタル弁明ノ理由ト同一ナレハ云々トアルモ代言人ハ広躰等ノ趣旨ト同一ナリト申立タルコトナキノミナラス代言人カ陳述セシ趣旨ハ仮令常事犯トスルモ治罪法ニ於テ正当ノ管轄ハ犯罪地ノ裁判所ニ属スルコト同法第四十条第一項ノ如ク其犯罪地数個ノ管轄ニ分レタルトキハ同第四十一条アリ而シテ犯罪地ノ分明ナラサルトキノ為メ同第四十条第一項ノ例外アリ個八十四年第四十六号公布ヲ以テ犯罪ノ地分明ナル被告

人ト雖トモ囑託アリタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ニ於テ管轄スルコトヲ定メラレタルモ一事件ニ付テノ共犯人ハ之ヲ一個ノ裁判所ニ管轄スヘキコトハ法理ノ然ラシムル処ニシテ又同第四十四条第二項ノ定メアリ且同第三十九条ニ照スモ数人通謀シ異時異所ニ於テ数罪ヲ犯スモノニ管轄スヘキコトヲ定メラレタリ然ルヲ況ンヤ本件ハ共犯数名ヲ東京甲府千葉栃木ニ分割セラレ剩サヘ各管轄違ノ申立ニ対シ其判決ヲ異ニシ而シテ共犯中別ニ東京ニ於テ犯罪アリテ東京重罪裁判所正當ノ管轄ニ屬シ又数人共犯ニテ茨城ノ管轄ニ屬スル犯罪アリ此場合タル数個ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯数名アルモノニテ治罪法第四十四条第二項ニ適當スルモノナレハ果シテ東京ニ於テ先ニ予審ニ着手セシナラハ本件モ東京重罪裁判所ノ管轄タルヘキヤ勿論ナリト又檢察官ノ弁駁ニ対シ治罪法第四十条ハ地ニ付テノ裁判管轄ノ總則ニテ第四十一条以下ハ其變則ナルモ變例ハ通例ニ勝ツトハ一般ノ法語ニシテ變例ニ適シ若クハ通例變例相抵触スルトキハ變例ニ準拠セサル可ラス本件ノ如キ治罪法第四十四条第二項ニ適スルモノナレハ之ニ準拠セサル可ラス十四年第四十六号公布ハ治罪法第四十条二項ヲ擴張シタルニ止リ同法中共犯同判ノ精神ヲ變更シタルニアラス第四十一条以下ト同ク變例ナリト申立タルモノニテ広躰等ノ趣旨ハ別異ナルニ此点ニ対シ何等ノ判決ヲ与ヘサルハ治罪法第四百三十六條第二ノ場合ニ適當スルモノナリト云フニアリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ代言人仁杉英ノ陳述立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ本按前キノ上告ハ河野広躰外二名ノ上告ト同一事件ニシテ広躰外二名カ上告ノ要旨ハ共犯数名各所ニ分割セラレタルモ分割スヘキモノニ非ス一括シテ管轄スヘキモノトノ趣旨ニテ吉副カ上告ノ主点ハ国事犯ト云フニアリテ其第三点タル代言人擴張論旨ハ仮ニ常事犯トスルモ栃木重罪裁判所ノ管轄ニ非ス先キニ予審ニ着手セシ裁判所ニ一轄スヘキモノト云フニアリテ帰着スル処分轄スヘカラストノ趣旨ニテ只其理由ヲ敷衍スルニ至リ治罪法第三十八条第三十九条ヲ援引スルト同法第四十四

条ヲ援引スルトノ少差アルモ結局分割ス可ラストノ趣旨ヲ弁明スルニ過キサレハ其分割ス可ラストノ旨要ハ同一ナルモノナリ而シテ曩キニ本院於テ宣告シタル判文ニ（明治十四年第四十六号公布タル治罪法第四十条ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候処当分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖トモ管轄裁判所ヨリ囑託アリタルトキハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシト規定シタル法律ニシテ被告人一名タルト数名タルト正従犯アルトキトノ明文ナケレハ数名ノ共犯者各所ニ於テ逮捕セラレタル場合ト否トニ論ナク其犯罪地ノ管轄裁判所ヨリ囑託アリタルトキハ各逮捕地ノ裁判所ニ於テ之ヲ管轄スルハ素ヨリ当然ナリト）弁明シアリテ本件ノ如キ該四十六号公布ニ依リ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル場合ニハ他ノ法条ニ依ラス各逮捕地ノ裁判所ニ於テ分割スヘキモノトノ判旨ニテ其末段ニ代言人カ申立タル仮ニ常事犯トスルモ栃木重罪裁判所ノ管轄ニアラストノ点ニ対シ広躰外二名ノ上告ニ対シ与ヘタル弁明ノ理由ト同一ナリト判決シタルハ上告第三点ノ拡張趣旨ニ対シ判決ヲ与ヘタルモノナリ凡ソ裁判ハ訴フル処ノ趣旨ニ対シ判決ヲ与フルヲ以テ足ルモノニテ其趣旨ヲ敷衍弁明スル為メ引証セシ陳述ノ言辞ニ対シ一口判決ヲ与フヘキ限りニ非ストス依テ本按哀訴ノ趣旨相立サルモノト判定シ治罪法第四百二十七条ニ則リ之ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ検事堀田正忠立会宣告ス

裁判長判事 荒木博臣 ㊦

専任判事 河口定義 ㊦

判事 武久昌孚 ㊦

判事 北村泰一 ㊦

明治十八年十二月十六日

判事 馬屋原二郎 印  
書記 石坂義雄 印

(9) 宣 告 書

茨城県常陸国真壁郡下館町

士族無職業

富 松 正 安

明治十八年十二月  
三十八年八ヶ月

明治十八年十二月三日<sup>(二十三)</sup>千葉重罪裁判所ニ於テ右正安カ被告事件ノ公判中管轄違ノ申立ヲ審理シ被告ハ已ニ予審終結言渡ニ対スル故障ノ判決ニ服セス犯罪ノ性質ニ依リ管轄違ノ上告ヲ為シ大審院ニ於テ棄却ノ判決ヲ経タレハ再ヒ同一ナル管轄違ノ申立ヲ為スコトヲ得ストシ該申立ヲ棄却スト言渡シタル裁判ヲ不当ナリトシ被告富松正安ハ上告ヲ為シタリ其要領ハ原裁判所カ本案管轄違ノ申立ヲ判決セシ理由ハ前後撞着シテ法理ヲ誤リ請求ヲ受タル点ニ付判決ヲ与ヘサルモノナリ抑被告カ前キニ予審故障ノ判決ニ対シ上告セシ趣旨ノ内犯罪ノ性質即チ国事犯ナリトノ論点アリト雖モ當時大審院ハ犯罪ノ性質即チ事実ノ判定ハ予審及ヒ会議局判官ノ認定ヲ動かサ可カラサル旨ヲ以テ判決セラレタリ。然レハ事実ノ認定ハ予審官ヲ外ニシテ公判ニ於テスルノ外ナシ故ニ公廷ニ於テ証拠ヲ拵ケ之ヲ論シタルニ原判官ハ前ノ上告ハ犯罪ノ性質即チ事実ナルコトヲ認メ言渡ノ理由トナシナカラ大審院ニ於テ法律上ニ係ル判決ヲ経タルトキハ治



罪法第四百三十四条ニ於テ其判決ハ確定ノモノト云フヲ以テセリ蓋シ該条ハ法律ノ見解ヲ異ニスル上告ニ対シ与ヘタル判決ヲ云フモノニテ決テ事實ノ上告ニ迄及ホスモノニ非ス若シ予審官ノ認メタル事實カ上告ノ上確定シタルハ此事実ニ対シ公判ニ於テ論スルコトヲ得ストセハ予審ニ於テ上告シタル事件ニ付公判ヲ開クハ無用ト云ハサルヲ得ス豈此ノ如キ理アランヤ又原裁判所ハ予審言渡又ハ會議局判決カ確定スルモ公判ニ於テ管轄違ノ申立ヲ為シ得ヘント云ヒナカラ同シク予審判決ノ確定ヲ區別シ上告ノ上確定シタルトキハ之ヲ為シ得サルモノト確定力ニ差違アル如ク判決シタルハ理由ノ齟齬スルモノナリ要スルニ原判官ハ治罪法第四百三十四条ノ法理ヲ誤リ予審ノ確定ヲ公判ニ及ホシ事實ノ判決ヲ法律ノ判決ニ枉ケテ被告カ申立タル論理ト証拠トニ付判決ヲ与ヘサルモノト云ヒ原裁判ノ破毀ヲ求ムルニアリ対手人検事塩野宜健ハ上告趣旨不当ニシテ其理由ナケレハ速カニ棄却アランコトヲ求ムト答弁セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ上告代言人松尾清次郎ノ陳述立會検事ノ意見ヲ聴キ之ヲ審按スルニ上告ノ理由トスル処訴ヲ受ケタル点ニ付判決ヲ与ヘス又ハ理由ニ齟齬アリト云フニアレトモ原裁判言渡ヲ閱シテ之ヲ一件書類ニ徵スルニ被告ハ前キニ予審言渡ノ故障ニ付為シタル會議局判決ニ対シ犯罪ノ性質即チ国事犯ナリトノ趣旨ヲ以テ管轄違ノ上告ヲ為シ大審院ニ於テ(被告カ自ラ内乱ノ目的ニ出シ所為ナリト主張スルマテニテ原裁判所ハ其事實ヲ認メサル上ハ高等法院ノ管轄ニ屬スヘキモノニアラス)ト之カ棄却ノ判決ヲ受ケ重罪裁判所ニ移サレタルモノナレハ公判ニ於テ新ナル証憑ヲ発見シ事實ノ変更ヲ生シタル場合ハ格別既ニ予審ニ於テ蒐集シタル調書及ヒ諏訪長三郎ノ手続書又ハ檄文ノ写等ヲ資料ト為シ今又犯罪ノ性質国事犯ナルヲ以テ管轄違ナリト主張スルハ即チ同一ノ事柄ニ対シ再ヒ上告ヲ為シタル者ニ過キサレハ本按上告ハ無論成立セサルモノト判定ス

以上ノ如クナルヲ以テ本按上告ハ治罪法第四百二十七条ニ依リ之ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事川目亨一立会宣告ス

明治十九年四月十日

(10) 宣 告 書

裁判長判事 荒木博臣

専任判事 河口定義

判事 武久昌孚

判事 北村泰一

判事 安居修蔵

書記 石阪義雄

愛知県三河国碧海郡野田村

士族

小林篤太郎

明治十九年一月  
十九年七ヶ月

茨城県常陸国真壁郡下館町

士族

保田駒吉

明治十九年  
滿二十六年

明治十九年一月廿五日甲府重罪裁判所ニ於テ右篤太郎駒吉カ被告事件ノ公判中管轄違ノ申立ヲ審理シ被告等カ所為ノ  
実跡及ヒ共犯者各証人ノ陳述ニ徴スルニ政事改良ノ目的ニ出テタル挙行ト信認スルヲ得サレハ当重罪裁判所ノ管轄ニ  
非ストノ申立ヲ棄却スト言渡タル裁判ニ服セス被告兩名カ各自上告スル趣旨ハ帰スル処同一ニシテ其要領タル被告等  
ノ所為ハ其目的要路ノ顯官ヲ斃シ政事ノ改良ヲ図ラント愛國憂世ノ士結合シ彼レニ議シ此ニ談シ爆烈彈ヲ製スル等其  
計画一朝ノ事ニ非ス而シテ公訴狀ニ列記スル第一乃至第七ノ所為ハ実地ニ着手シタルモノニテ加波山ニ旗ヲ樹テ檄ヲ  
人民ニ伝ヘ義兵ヲ挙ケ又ハ町屋分署ヲ襲撃シ途中巡查ト奮闘ヲ試ミ兵威ヲ示シ其他兵器金穀ヲ募ラント近郷豪家ニ説  
キ之ヲ借入ル、ニ証書ヲ差入レ及ヒ加波山社務所ニ贈リタル書簡等皆国事犯ノ確証ニシテ被告等ハ高等法院ノ管轄ニ  
屬スヘキ者ナルコト明カナルニ檢察官ハ枝葉ノ一端ニ泥ミ右等ノ所為ハ強盜又ハ罪ヲ免カレン為メ警官ヲ殺傷シタル  
常事犯トシ公訴シタルニ依リ公判ニ於テ管轄違ノ申立ヲ為シタルニ原裁判所ハ被告等カ所為ノ実跡及ヒ共犯者各証人  
ノ陳供ニ徴スルニ政事改良ノ目的ヲ以テ此挙行ニ至リシモノト信認スルヲ得スト棄却ノ判決セシモ所為ノ実跡トハ何  
レノ点ヲ指シタルヤ若シ其所為区々ノ形跡ノミヲ看過セハ或ハ知ラサルモ之カ全体ヲ探究セハ常事犯ニ非サルコト明  
カナリ且共犯者及ヒ各証人ノ陳供ハ却テ国事犯ナルコトヲ確ムヘキモ常事犯ノ的証トスルニ足ラス唯一二共犯ノ陳述  
少シク異ムヘキ処アリト雖モ是己レ等カ他ニ常事犯アレハ心窃カニ忌憚スル処アリテ口述ヲ枉ケタルモノナレハ採テ  
以テ被告等ノ所為ヲ判定スルニ足ラス然ルニ原裁判所ハ漠然信認スルヲ得スト臆測ノ判定ヲ下シタルハ事実ノ理由ヲ  
付セサル不法ノ裁判ナリト云フニアリ

対手人検事長谷川秀実ハ上告趣旨ハ其理由ナキモノニ付速ニ棄却アランコトヲ望ムト答弁セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ立会檢事ノ意見ヲ聴キ之ヲ審按スルニ上告ノ理由トスル処加波山ニ義兵ヲ挙ケ檄ヲ人民ニ伝ヘ又ハ町屋分署ヲ襲撃シ巡查ト奮闘ヲ試ミ其他兵器金穀借入ノ証書及ヒ書簡等ハ国事犯ノ確証ナルニ被告等カ所為ノ実跡又ハ採ルニ足ラサル共犯者証人等ノ陳供ニ依リ国事犯ニアラスト漠然臆測ノ判定ヲ下シタルハ不法ナリト云フニアリト雖モ単ニ自己ノ主張スル処ノモノハ国事犯ノ確証ナリ原判官ノ採取セシモノハ証トスルニ足ラスト己レノ思想ヲ以テ名ヲ理由不備ニ藉リ徒ラニ証拠ノ取捨ヲ批難スルニ過キサレハ治罪法第四百十條ニ定メタル上告ノ理由トナスコトヲ得ス如何トナレハ諸般ノ証憑ヲ取捨シ事實ヲ判定スルハ事實承審官ノ特有スル権内ナルコト治罪法第四百十六條第二項ニ規定アリテ他ヨリ批難シ得サルモノナレハナリ依テ上告ノ趣旨相立サルモノト判定ス以上ノ如クナルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ則リ本按上告ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事子爵加納久宜立会宣告ス

裁判長判事 荒木博臣

專任判事 河口定義

判事 武久昌孚

判事 北村泰一

判事 安居修蔵

書記 石阪義雄

明治十九年四月十日

(11) 宣 告 書

福島県岩代国耶麻郡塩川村  
千八百二十四番地同居士族

横 山 信 六

明治十八年十二月  
二十三年

同県同国同郡米岡村平民

農六郎長男

三 浦 文 治<sup>(次)</sup>

明治十八年十二月  
三十年四ヶ月

同県磐城国西白川郡中畑

新田村字西浦平民農鎮平

長男

小 針 重 雄

明治十八年十二月  
三十一年六ヶ月

同県同国田村郡三春町

士族

琴田岩松

明治十八年十二月  
二十三年十ヶ月

同県同国磐城郡中神谷村

字石脇士族克孝弟

草野<sup>(左)</sup>佐久馬

明治十八年十二月  
二十年

同県同国田村郡三春町

士族

五十川元吉

明治十八年十二月  
二十年四ヶ月

茨城県常陸国真壁郡下館町

士族

玉水嘉一

明治十八年十二月  
二十六年七ヶ月

福島県岩代国耶麻郡下柴村

平民

原 利 八

明治十八年十二月  
三十四年十一月

明治十八年十二月二十八日東京重罪裁判所ニ於テ右信六外七名カ被告事件ノ公判中管轄違ノ申立ヲ審理シ被告等カ所為ノ実蹟ニ拠レハ其申立ル事項ハ国事犯ノ証徴ト信認スルヲ得サレハ該申立ヲ棄却スト言渡タル裁判ヲ不法ナリトシ被告横山信六外七名カ上告スル要領ハ原裁判官カ本按管轄違ノ申立ヲ棄却セラレタル主旨ハ檄文等ノ証左アリト雖トモ町屋分署等ニ於テ金円其他ヲ奪取シタル実蹟ニ拠レハ前掲ノ事項ハ国事ニ関スル犯罪ノ証徴ト信認スルヲ得スト云フニ過キスシテ特ニ結果ノミニ依リ其目的如何ヲ究メサル不法ノ裁判ナリ凡ソ犯罪ハ其目的結果相応シテ成立ツモノナレハ刑法第二百二十二条第二百二十八条ノ設アリテ其目的ニ依リ之カ処分ヲ區別セラレタリ因是觀之百般ノ所為必ス結果ノミニ拘泥シ裁判ス可カラサルコトハ法律ノ定ムル処ナリ然ルニ原裁判所ハ緊要ナル目的ノ在ル処ヲ措キ結果ノミニ拠リ管轄違ノ申立ヲ棄却シタルハ治罪法第四百十條第三項ニ該当スルモノナリ又裁判ハ必ス之カ証徴憑ヲ明示シ且其理由ヲ付ス可キモノニテ無原因ノ推測ハ法ノ許サ、ル処ナリ然ルニ原裁判ハ町屋分署等ニ於テ金円其他ヲ奪取シタル等ノ実蹟ニ拠レハトノミ掲ケ其等ナル語ハ何ヲ指シタルヤ何レノ証徴ニ照シ之ヲ認メリルヤ知ルニ由ナク加之爆裂彈製造檄文及ヒ旗借用証書ノ文詞分署ノ襲撃各被告カ供述ノ吻合其他ノ行為カ何故ニ国事ニ関スル犯罪ノ証徴ト信認スルヲ得サルヤノ理由ヲ付セサルハ治罪法第四百十條第九項ノ原由アル不法ノ裁判ナリト破毀ヲ請求シ尚ホ信六重雄ハ各自弁明書ヲ以テ被告等カ犯罪ノ目的ハ自己ノ慾念ヲ飽カシムル強盜ノ所為ニ非ス政事改良ノ革命ヲ行ハントスル即チ国事犯ナリトノ理由ヲ縷述シ前意ヲ敷衍スルニアリ

对手人原裁判所檢事長加納謙ハ上告ノ趣旨ハ採証如何ヲ論スルニ過キサレハ棄却アルヘキモノト思量スル旨答弁セリ

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ被告重雄ヲ除キ信六外六名上告代言人浦田治平仁杉英山田泰造松尾清次郎中島又五郎ハ各上告趣意ヲ弁明シ且原裁判所ハ同一ノ判文中共犯人門名茂次郎（奈）ニ対スル判決ノ理由ニハ果シテ該目的ヲ以テ財貨ヲ掠奪シタリト認ムヘキ他ノ事蹟ノ徴スヘキナケレハ云々トアリ然ラハ則チ他ニ其事蹟ヲ徴スヘキ証アレハ金員強奪モ其目的ニ依リ国事犯トナルヘシトノ判意ナリ然ルニ被告等ニ対シテハ其目的ヲ確カムヘキ証拠アルニ何等ノ弁明ナク之ヲ消滅ニ帰セシメ単ニ金員ヲ奪ヘタル所為ニ依リ強盜トシタルハ理由ノ齟齬ナリ又町屋分署襲撃金員奪取ノ年月日ヲ示サ、ルハ理由ノ不備ナリト拡張論告セリ茲ニ立会検事ノ意見ヲ聴キ之ヲ審按スルニ凡ソ犯罪ハ目的の結果相待テ成立ツヘキコト固ヨリナリト雖トモ其目的タルヤ犯人ノ意思中ニ在ルモノナレハ已ニ現出セシ行為ト各証憑トニ因リ認知スルモノニシテ之ヲ判定スルハ乃チ事實判官ノ職權ニ属シ他ノ得テ容喙ス可キモノニ非ス故ニ被告等カ国事犯ノ証ナリト云フ檄文爆裂弾其他旗旌借用証書等アルニモセヨ必ス之ヲ採ラサル可ラスト云フノ理ナク之ヲ取捨スルハ所謂事實判官ノ權内ナルヲ以テ原判官カ其現出セシ行為ニ徴シ以テ国事犯ノ証憑ト信認スルヲ得ス即チ金員強奪ノ目的ナリト判定シタルコト明カナレハ之ヲ無原因ノ推測ト論スルヲ得ス而シテ町屋分署等ニ於テ金員其他ヲ奪取シタル等トアルハ理由ノ不備ナリト云フモ原判文ニ認ムル処ハ現ニ取調ヘ来リタル最モ著大ナル実蹟ヲ挙示シタルモノニシテ等ナル語ハ其他小部分ノ事柄ヲ指的（アマ）シタルコト自ラ推知スルニ足レハ止タ等ノ一語ニ拘泥シ瑕瑾ノ判定ト為ス可ラス又門名茂次郎（奈）ニ対スル言渡書ヲ參觀スルニ其訴フル処金員掠取ハ政事改良ノ目的ナリト云フノ趣旨ナルヲ以テ之ニ対シ該目的ヲ以テ財貨ヲ掠奪シタリト認ムル事蹟ノ徴ス可キナシト判決シタルニ在リテ被告等カ訴旨ト其理由ヲ異ニスレハ敢テ理由ノ齟齬ト云フヲ得ス何ントナレハ凡テ裁判ハ訴フル処ノ主点ニ向ヘ判決ヲ為ス可キモノニシテ其趣旨ノ異ナル点ニ対シテモ仍ホ同一ノ判決ヲ与フヘキ道理ナケレハナリ其他分署襲撃金員奪取ノ年月日ヲ示サ、ルハ不



法ナリト云フモ本件ハ管轄違ノ申立ニ就キ判決ヲ与フルニ過キスシテ未タ此事實ニ因リ刑ノ適用ヲ為スニアラサレハ或ハ年月日ノ理由欠クコトアルモ被告等ノ利害ニ毫モ影響ヲ感スルノ患ヘナケレハ是亦不法ノ裁判ト為スヲ得サルモノニシテ要スルニ上告趣旨及ヒ代言人擴張論旨ハ原判官カ正当ノ職權ニ由リ言渡タル事實ノ判定及ヒ採証ノ当否ヲ論疏シ徒ラニ破毀ヲ試ムルニ外ナラサレハ一モニ適スル上告ノ原由ナキモノト判定ス以上ノ理由ナルヲ以テ本按上告ハ治罪法第四百二十七条ニ依リ之ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事子爵加納久宜立会宣告ス

裁判長判事 荒木博臣

專任判事 河口定義

判事 武久昌孚

判事 北村泰一

判事 安居修蔵

書記 石阪義雄

明治十九年四月十日

(12) 宣 告 書

福島県岩代国耶麻郡塩川村

千八百二十四番地同居士族

横山信六

明治十九年七月  
二十三年七月

同県同国同郡米岡村二百八十九番地平民農六郎長男

三浦文次

同  
三十年十一月

同県磐城国西白川郡中畑新田村字西浦九十四番地平民農鎮平長男

小針重雄

同  
二十二年一月

同県同国田村郡三春町百二十四番地士族

琴田岩松

同  
二十四年五月

同県同国磐城郡中神谷村字石脇十七番地士族克孝弟

草野左久馬

同  
二十年七月

同県同国田村郡三春町

八十一番地士族

五十川元吉

同  
二十年十一月

右信六外五名カ被告事件ニ付明治十九年七月三日東京重罪裁判所ニ於テ被告等ハ強盜及ヒ故殺等ノ所為アル者トシ刑法第四百条第三百七十八条第三百七十九条第三百八十条第五百条第一百十二条第一百十三条第二百九十六条第三百三十九条第百条ニ依照シ一ノ重キ第二百九十六条ノ罪ニ從ヒ而シテ草野左久馬五十川元吉ハ犯時十六歳以上廿歳未滿ナルヲ以テ仍ホ第八十一条ニ照シ其罪ヲ宥恕シ本刑ニ一等ヲ減スヘキ者ナリ仍テ横山信六三浦文次小針重雄琴田岩松ハ第二十九十六条ヲ適用シ各死刑ニ草野左久馬五十川元吉ハ同条ノ刑ニ一等ヲ減シ各無期徒刑ニ処ス言渡シタル裁判ヲ不法ナリトシ被告等ハ各上告ヲ為シタリ其要旨ハ横山信六カ第一ノ所為ニ対スル論旨ノ外皆同一ニシテ第一本案被告等カ各個ノ所為ニ付何等ノ目的ニ出テタルヤヲ明示セス即チ事實ノ理由ヲ付セサルトノ事第二判文中第五ノ所為ハ屋内ヨリ発砲セラレ之ニ応シタルモノナルコトハ各陳述ノ符合スル所ナリ然ルニ原裁判所ハ何等ノ証拠ナキニ強盜ヲ行ハンカ為メ所外ヨリ恐嚇シタリト判定シタルハ事實ノ理由齟齬アリトノ事第三凡共犯ナルモノハ二人以上共謀シテ現ニ一罪ヲ犯スヲ謂フモノニシテ本案第六ノ如キ臨時ノ出来事ニハ共謀ノアルヘキ筈ナキヲ以テ其局面ニ当ル者ノミ其實ニ任スヘキモノナレハ宜ク各箇ノ所為ヲ區別スヘキモノナルニ原裁判所ハ之カ區別ヲ為サ、ル理由且其臨時殺意ヲ生シタ

リト認メラレタル理由ヲ明示セサルハ事実理由ヲ付セサルトノ事第四公廷ニ於テ朗読セサル勝田周三郎同トクノ予審調書ハ公訴状ニ明記ナク公廷ニモ朗読セラレタルコトナクシテ之ヲ証拠トセラレタルハ越権ナリトノ事第五藤村岩吉外三名ノ警察調書ハ現行准現行ノ場合ニモアラス相当官吏ノ囑托ニ由リタルニモアラサレハ権外ノ調書ニシテ尚且被告等ノ審理ニ就キ治罪法第八十一条等ノ式ヲ履行セラレタルコトナケレハ被告人等ニ対スル証拠トナルヘキモノニ非スト論弁シタルニ此点ニ付何等ノ判決ヲ与ヘストノ事第六前項ノ如キ不法ノ調書ヲ証拠トシタルハ越権ナリトノ事第七判文中第三第四ノ所為ハ教唆者アリト見ルヘキ点ナキニ刑法第五條ヲ適用セラレタルハ擬律ノ錯誤ニシテ且該法條ヲ適用スルノ理由ヲ掲ケサルハ法律ノ理由ヲ付セサルトノ事第八刑法第二百九十六條ハ一般ノ人ニ対スル法條ニシテ本案第六ノ如ク追捕官吏ニ係ル者ハ第三百三十九條第四百條及ヒ第二百九十九條ニ該當スル者ナリ既ニ原裁判所モ第八ノ所為ニ就キ第三百三十九條ヲ適用シナカラ第六ノ所為ニ殺傷アリトテ第二百九十六條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナリトノ事又被告信六カ第一ノ所為ハ已ニ強盜ノ結果ヲ得テ然ル後チ追捕官吏ニ抵抗シタル者ナレハ或ハ刑法第三百九十九條第四百條第三百一條第三百四條ニ當ルヘキモ第三百八十八條ニ適當セサル者ナリ況ンヤ其負傷セシメタル河野広体独リ其責ニ任スヘキ者ナルヲヤ然ルニ第四百四條第三百八十八條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ仍ホ被告小針重雄及ヒ代言人浦田治平仁杉英ハ上告趣意擴張書ヲ差出シ前趣旨ヲ敷衍シタリ

対手人檢事岩田武儀ハ上告論旨ヲ駁シテ原裁判相當ナリト答弁セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ法式ヲ履行シタルニ代言人浦田治平仁杉英北田正董松尾清次郎山田泰造ハ各上告趣旨ヲ弁論シ且証憑列記中唯某ノ調書トノミニテ証人参考人ノ區別ヲ為サス其他第五ノ所為ハ刑法第四百十七條ヲ適用スヘキニ強盜未遂ヲ以テ処断セラレタルハ總テ不法ナリト論告セリ立會檢事加納久宜ハ本人上告趣旨並ニ代言人

論旨ハ総テ上告ノ原由ナキ旨意見ヲ陳述セリ仍テ判決スルコト左ノ如シ

上告第一ハ原判文ニ被告等カ犯罪ノ目的ヲ明示セスト云フニ在レトモ其目的ノ如何ハ該判文ヲ閲続スルニ強盜又ハ故殺等ナルコト一目瞭然ナレハ其目的ヲ明示セス事實ノ理由ヲ付セストシ以テ上告ノ原由ト為スヲ得ス上告第二ハ屋内ヨリ発砲セラレ云々強盜ヲ行ハンカ為メ戸外ヨリ恐嚇シタリト判定シタルハ理由ノ齟齬アリト云フニ在レトモ治罪法第四百十條ニ所謂理由ノ齟齬トハ同一判文中前後ノ事實理由矛盾スルモノヲ云ヒタルコトニシテ上告者カ陳述スル如キ其認定シタルコトガ認定外ノコトト齟齬スル等ノコトニアラサルナリ要スルニ該上告点ハ事實ノ判定ヲ論難スルニ過キスシテ適法ノ原由ナキモノトス上告第三ハ要スルニ本件第六ノ所為タル臨時ノ出来事ニテ共謀ノアルヘキ筈ナケレハ共犯ニアラス故ニ宜シク之カ區別ヲ為スヘキニ之ヲ為サス畢竟事實ノ理由ヲ明示セスト云フニ在レトモ凡ソ刑法中其総則ハ特ニ例外ノ場合ヲ明示セサル以上ハ之ヲ当行スヘキハ勿論ナリ故ニ故殺ノ場合ニ於ケルモ決シテ刑法第四百條ヲ取除クヲ得ス而シテ該條タル二人以上現ニ一罪ヲ犯シタルモノハ皆共犯ト為スノ意ナルコトハ該法文ニ於テ明瞭ナルヲ以テ故殺ニ共犯ナシト云フヲ得ス而シテ原判文ヲ閱スルニ現場逃ル、ニ途ナキヲ知テ臨時殺意ヲ生シ刀ヲ揮ヒ爆発彈ヲ連投シ巡查村田常儀ヲ殺害シ云々トアリテ被告等ノ所為ハ連合一致ニ出タリト認メタルモノニシテ即チ共犯一体ノ所為ナルニ因リ固ヨリ之カ區別ヲ必要トセサルモノトス故ニ此点ニ付理由ヲ付セサルモ不法ノ裁判ト云フヲ得ス上告第四ハ勝田周三郎同トクノ予審調書ヲ朗読セサル如ク云フト雖トモ公判始末書ヲ調査スルニ書記ヲシテ朗読セシメタルコト明白ナレハ是亦不法ニアラス上告第五ハ権外ノ調書又ハ被告等審問ニ就キ宣誓ノ式ヲ履行セサル証人ノ調書ハ被告人等ニ對シ証拠ト為ス可ラサルコトヲ論弁シタルニ此点ニ付何等ノ判決ヲ与ヘスト云フモ凡ソ裁判ハ被告事件ニ就キ罪ノ有無ヲ判決スヘキ者ニシテ公廷ノ弁論ニ對シ一々判決ヲ与フヘキモノニアラス況ンヤ其証拠ヲ採ル

ト否トハ裁判官ノ特權ナルニ於テヲヤ上告第六ハ前項ノ如キ不法ノ調書ヲ証拠トシタルハ越權ナリト云フニ在レトモ凡ソ法律ニ於テ無効ノ記載ナキ調書又ハ他ノ被告ノ審理ニ就キ宣誓シタル証人ノ調書ノ如キモ幾分ノ証拠ト為スニ妨ケアルコトナシ然ルヲ以テ原裁判官カ之採テ幾分ノ徵憑ト為シタルモ敢テ越權ナリト云フヲ得ス上告第七ハ第三第四ノ所為ニ於ケル教唆ノ事實ナシ云々ト云フモ其第三ニ富豪ノ家ニ就キ金円物品ヲ強取セシコトヲ謀リ横山信六琴田岩松玉水嘉一原利八ハ云々該山ニ居残リ云々トアルヲ見レハ横山信六等カ三浦文次等ヲシテ強盜ヲ行ハシメタリトノ判意ナルコト推知スルニ足ルヲ以テ之ニ刑法第二百五条ヲ適用シタルハ相当ニシテ擬律ノ錯誤又ハ理由ヲ付セサル裁判ト云フヲ得ス上告第八ハ刑法第二百九十六条ハ一般ノ人ニ對スル法条ニシテ追捕官吏ヲ殺傷シタルカ如キ者ニ適用スヘカラス或ハ本案第六ノ如キハ刑法第三百九十九条及ヒ第二百九十九条ヲ適用スヘク云々ト論告スレトモ刑法第二百九十六条ニ所謂人トハ官吏ナルト一般人民ナルトヲ分タサルモノトス何トナレハ其第四百条ノ如キハ特ニ毆打創傷ニ限リタルコトハ該法文ニ於テ明カニシテ故殺ノ場合ヲ包含セサルモノナレハ己レノ罪ヲ免レンカ為メ追捕者ヲ故殺シタルカ如キハ官吏ト人民トヲ分タス皆刑法第二百九十六条ヲ当行スヘキハ毫モ疑ヲ容ルヘカラサレハナリ況ンヤ其刑ノ權衡上ヨリ之ヲ觀ルモ官吏ニ對スル刑法第四百条ハ通常ノ刑ニ一等ヲ加フヘキモノナリ然ラハ官吏ヲ故殺シタル場合ニ於テ却テ通常刑ヨリ輕キ刑ヲ科スヘキノ理ナキコト亦多弁ヲ要セサルナリ故ニ本案第六ノ所為ニ對シ第二百九十六条ヲ適用シタルハ当然ナリトス又横山信六カ第一ノ所為ハ云々刑法第三百八十条ニ該當セサル旨論告スレトモ原判文第一ニ<sup>略前</sup>金五円八十錢ヲ強取シ其場ヲ立去ルヤ否ヤ直チニ豊寿郎ノ追哄スル処トナリ云々トアルヲ以テ該判文ノ認ムル所ハ將サニ立去ラント為シタルマテニシテ未タ強盜ノ範圍ヲ脱セサルニ已ニ追哄シタルモノナレハ被害者ノ家宅内ニ於テ人ヲ傷シタルト一般ナルヲ以テ原裁判所カ刑法第三百八十条ヲ当行シタルモ不法ニアラス且共

犯者ハ同一体ト見做スヘキ者ニシテ下手者ノ誰タルヲ問ハサル者ナレハ河野広体一人ノ所為ナリトノ論旨モ亦不相立モノトス又代言人ハ証憑中証人参考人タルノ資格ヲ明示セスト云フモ裁判官カ其証人タルト否トニ拘ハラス其調書ヲ心証ニ採ルコトハ毫モ妨ケアルコトナケレハ之カ明示ナキヲ以テ不法ト為スヲ得ス其他第五ノ所為ハ強盜罪ニ非ラスト云フモ是亦原裁判文ニ一同シテ強盜ノ未遂犯タルコトヲ認メタルモノナレハ其事実ヲ非難シテ上告ノ原由ト為スヲ得サルモノトス右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七条ニ照シ本案上告ヲ棄却スル者也

於大審院檢事子爵加納久宜立会宣告ス

大審院刑事第二局長 池田 弥一 ⑩

大審院評定官 岡村 為藏 ⑩

同 土師 経典 ⑩

同 河 口 定 義 ⑩

同 山 本 昌 行 ⑩

裁判所書記 鈴 木 愿 治 ⑩

明治十九年八月十二日

(13) 宣 告 書

茨城県常陸国真壁郡下館町

甲八十六番屋敷士族無職業

保田駒吉

明治十九年七月  
二十四年九ヶ月

右駒吉カ被告事件ニ付明治十九年七月五日甲府重罪裁判所ニ於テ被告ハ小林篤太郎外数名ト共ニ持兇器強盜及ヒ故殺等ノ所為アル者トシ刑法第四百条第三百七十八条第三百七十九条第二百九十六条第一百二十二条第一百十三条第三百三十九条第百条ニ依照シ一ノ重キ第二百九十六条ニ依リ死刑ニ処スト言渡シタル裁判ヲ不法ナリトシ被告ハ上告ヲ為シタリ其要旨ハ本案被告事件中第一乃至第三及ヒ第六ノ所為ニ対スル処分ハ一理ナキニ非スト雖モ其第五即チ巡查ヲ殺害シタル事項ニ至テハ被告カ後隊ニ在テ預カラサル外ナリ然ルニ下手者ト同ク刑法第二百九十六条ヲ適用セラレタルハ不服ナリト云フニ在リ対手人検事長谷川秀実ハ上告趣旨ノ理由ナキ旨ヲ答弁セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五条ノ法式ヲ履行シタルニ代言人山田泰造ハ原判文第四ノ所為ハ家内ヨリ発砲セラレ之ニ応シタル者ナルニ被告ヨリ先ンシテ爆裂弾ヲ投シタルカ如ク判定シタルハ不法ナリ其他ハ五十川元吉外五名ノ上告事件ニ付陳述シタル処ト同一ナリト而シテ五十川元吉外五名上告ニ付論弁ノ主要ハ刑法第二百九十六条ハ一般ノ人ニ対スル法条ニシテ追捕官吏ヲ殺傷シタル者ハ同第百三十九条第百四十条及ヒ第二百九十九条ニ該当ス可キ者ナリ原裁判官モ既ニ第七ノ所為ニ付第百三十九条ヲ適用シナカラ殺傷アリトテ第二百九十六条ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナリ且ツ故殺ニ共犯ナントハ一般法律ノ原則ナレハ本案被告等カ連投シタル爆裂弾中何レノ丸ニテ巡查ノ死シタルヤヲ審理シ之ヲ區別セサル可ラス然ルニ之カ區別ヲ為サス数名共犯ヲ以テ処断シタルハ法理ニ悖戾セリト云ニ在リ立会檢事加納久宜ハ本人上告並ニ代言人論旨ハ共ニ其理由ナキ旨意見ヲ陳述セリ仍テ之ヲ判決スルコト左ノ如シ



上告ノ理由トスル処ハ原判文第五ノ所為即チ巡查ヲ殺害シタル事項ハ被告カ後隊ニ在テ之ニ与カラスト云フニ在レトモ原判文ヲ閱スルニ其第五ニ被告小林篤太郎保多駒吉ハ云々既ニ犯シタル罪ヲ免レン為メ臨時殺意ヲ生シ携フル所ノ爆裂彈ヲ投射シ又ハ抜刀ヲ以テ切掛リ遂ニ巡查村田常儀ヲ殺害シ云々トアルヲ以テ被告モ連合一致ナルコトハ原裁判官ノ認ムル所ナリ然ルヲ以テ他ノ下手者ト同シク刑法第二百九十六条ヲ当行シタルハ当然ナリトス又代言人ニ於テ刑法第二百九十六条ニ人ヲ故殺シ云々トアルハ一般ノ人ニ適用スル法条ニシテ官吏ヲ殺傷シタル者ハ同第三百三十九条第百四十条ヲ適用ス可キ者ナリト論弁スレトモ刑法第二百九十六条ニ所謂人トハ自己ニ対スル他人ニシテ官吏ナルト人ニナルトヲ問ハサルノミナラス其第四百十条ノ如キハ殴打創傷ノ時ニ限り適用ス可キ者タルコトハ其法文ニ於テ明カナリ且ツ同条ノ權衡上ヨリ之ヲ觀ルモ通常殴打ノ刑ニ一等ヲ加ヘ重キニ從フ者ナリ然ラハ故殺ノ時ニ至リ却テ通常ノ刑ヨリモ輕キ刑ヲ科スヘキ法意ニ非サルコトハ亦多弁ヲ俟タサルナリ故ニ第五ノ所為ニ付同第二百九十六条ヲ適用シタルハ其當ヲ得タル者トス又故殺ニ共犯ナントノ原則ヲ以テ一ノ論旨トナスト雖モ概シテ故殺ニ共犯ナキニ非ス即チ本案第五所為ノ如キ数名連合一致シテ人ヲ殺傷シタル場合ノ如キ是ナリ故ニ故殺ニ共犯ナント云フヲ得サルモノトス其他代言人カ第四ノ所為ニ付論告スル所ノ如キハ要スルニ裁判官ノ特權ヲ以テ認定シタル事實ニ對シ非難スルニ過キサルヲ以テ其効ナキ者トス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七条ニ則リ本案上告ヲ棄却スル者也

於大審院檢事子爵加納久宜立會宣告ス

大審院刑事第二局長 池田 弥一 ㊦

明治十九年八月十二日

|        |      |   |
|--------|------|---|
| 大審院評定官 | 岡村為藏 | 印 |
| 同      | 土師經典 | 印 |
| 同      | 河口定義 | 印 |
| 同      | 山本昌行 | 印 |
| 裁判所書記  | 鈴木愿治 | 印 |

(14) 宣 告 書

栃木県下野国下都賀郡

富張村平民農

大橋源三郎

明治十九年七月  
三十三年十ヶ月

右源三郎カ被告事件ニ付明治十九年七月三日栃木重罪裁判所ニ於テ被告源三郎ハ五十川元吉外二名ヲ数日間自宅ニ止宿セシメ同人等カ犯罪ノ用ニ供スル爆発弾ヲ仕込コトヲ知テ鉛丸ヲ製シ之ヲ九八郎ニ送致シ前第二乃至第五及ヒ第七ノ所為即チ持兇器強盜及ヒ同未遂犯ノ罪ヲ容易ナラシメタル者トシ刑法第百九条ニ照シ第二乃至第五第七ノ所為ニ対スル各条即チ刑法第三百七十八条第三百七十九条第百十二条第百十三条第百条ヲ適用シ正犯ノ有期徒刑ヨリ一等ヲ減シ重懲役九年ニ処スト言渡シタル裁判ヲ不法ナリトシ被告源三郎ハ上告ヲ為シタリ其要旨ハ原判文第十一ニ同人等カ

犯罪ノ用ニ供スル爆発彈ヲ仕込ムコトヲ知テ鉛丸ヲ製シ之ヲ九八郎ニ送致シ云々トアレトモ未タ以テ持兇器強盜ノ從犯ナリトナスヲ得ス何トナレハ刑法第九九條ノ法文タル正犯現ニ行フヘキ犯罪ノ種類如何ヲ知テ器具ヲ給与シ又ハ誘導指示シ其他予備ノ所為ヲ以テ正犯ヲ幫助シタル者ヲ罰スル精神ナレハナリ然ルニ唯犯罪ノ用ニ供スルトノ文詞ノミニテ其犯罪ノ種類如何ヲ明示セサレハ隨テ如何ナル犯罪ノ從犯ナルヤ之ヲ識別スルニ由ナク即チ事實理由ヲ欠キタル不法ノ裁判ナリ第二原判文中第一乃至第八及ヒ第十第十二ノ所為ニ對シテハ特ニ証拠ヲ指摘シアルモ單リ第十一及ヒ第九ノ所為ニ對シテ特ニ其証拠ノ指摘ヲ為サシテ有罪ノ判定ヲ為シタルハ越權ノ処分ナリト云フニ在リ對手人檢事補諸岡良佐ハ上告趣旨ノ理由ナキ旨ヲ答弁セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ法式ヲ履行スルニ代言人田沢鎮太郎ハ上告趣意書ノ通りニシテ他ニ擴張スヘキ点ナシト陳述シ立會檢事川目亨一ハ上告ノ理由ナキ旨意見ヲ開陳セリ仍テ之ヲ審按スルニ上告第一論旨ハ持兇器強盜ノ從犯タル事實理由ヲ明示セスト云フニ在レトモ原判文ヲ檢スルニ前略之ヲ九八郎ニ送致シ前第二乃至第五及ヒ第七ノ數項ノ犯罪ヲ容易ナラシメタリトアリテ其第二乃至第五第七即チ持兇器強盜及ヒ強盜未遂犯ノ事實ト照應スル文詞ナレハ前後通読シテ自ラ持兇器強盜ノ從犯タルコト明ナリ又其第二論旨ノ如キモ同判文ニ右ノ事實ハ各被告人ノ予審調書及ヒ當公廷ニ於テ前後ノ供述云々爆発彈十四個ト掲ケアルハ被告數個ノ犯罪ヲ認メタル証憑ヲ總括挙示セシモノニシテ即チ第九第十一ノ所為ノ事實ヲ判定シタル証憑ハ此中ニ明示シアルコトハ全判文ニ通読セハ明白ナリ而シテ其第一乃至第八及ヒ第九第十第十二ノ所為ノ証憑ヲ分掲セシハ特ニノ文字ヲ以テ細別シタルモノナルコト判然タレハ之ヲ証憑指摘セス或ハ越權ナリト云フ得ス然ラハ則原裁判上事實理由ノ不備又ハ越權等ノ処分ナキヲ以テ上告趣旨ハ其効ナキ者トス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七条ニ從ヒ本案上告ヲ棄却スル者也

於大審<sup>(マ)</sup>檢事<sup>(マ)</sup>檢事川目亨一立会宣告ス

大審院刑事第二局長 池田 弥一 ①

大審院評定官 岡村 為藏 ①

同 土師 經典 ①

同 河口 定義 ①

同 山本 昌行 ①

裁判所書記 鈴木 愿治 ①

(15) 宣 告 書

茨城県常陸国真壁郡下館町

四番地士族無職業

富 松 正 安

明治十九年三月  
三十八年十ヶ月

右正安被告事件ニ付明治十九年七月三日千葉重罪裁判所ニ於テ審理ノ末二人以上持刃器強盜ヲナシ或ハ為サシメ若ク

ハ已ニ行フテ遂ケス及ヒ罪ヲ免カレンタメ人ヲ故殺シ又ハ暴行ヲ以テ官吏ノ職務ヲ行フヲ抗拒シタル事實アリト認メ  
刑法第三百七十八條第三百七十九條第六十七條第五百五條第一百十二條第一百十三條及ヒ同第四百四條第二百九十六條第一百  
二條第一百十三條同第三百三十九條ニ依リ同第一百條ニ照シ一ノ重キ第二百九十六條ヲ當行シ死刑ニ処スト言渡タル裁判ヲ  
不當ナリトシ被告正安カ上告スル要領ハ原裁判所カ第五ノ事實ニ對シ刑法第四百四條ヲ適用シ被告ヲモ殺害ノ共犯トナ  
シタルモ醫師ノ檢案書ニ依レハ被害者巡查村田常儀ハ左胸部爆裂藥ノタメ即死シタルコト明カナレハ其一個拳大ノ爆  
裂藥ハ一個人ノ投シタルコト論ヲ俊タサル処ニシテ原判官モ該檢案書ヲ証トシ前陳ノ如ク判定シタルモノナリ然ラハ  
則該爆裂藥ヲ投シタルハ何人ノ所為ナル乎之ヲ審理セサルヘカラス正安果シテ其人ナリトセンカ他ノ十五名中現ニ故  
殺罪ニ処セラレタル者アルヲ聞ク加之判官モ果シテ正安ナリトノ事實ヲ認メス且之カ証跡ナキニ十六名共犯トシタル  
ハ事實及ヒ法律ノ理由齟齬スルモノ也且夫レ村田常儀ノ死ハ誰ノ所為ナリト確定シ判決ヲ下サ、ルハ事實ニ付理由ヲ  
付セサルモノナリ又該事實ヲシテ十六人共犯トスルモ其内或ハ創傷シテ未タ遂ケサルモノアリ或ハ未タ手ヲ下サ、ル  
モノアリテ其故殺ヲ遂ケタルハ一人ノ所為ニ出ツルモノナレハ刑法第四百四條ヲ適用シ皆正犯トナスモ其法文ノ如ク既  
遂者ハ既遂ノ正犯トシテ未遂者ハ未遂ノ正犯トシテ各自犯シタル未遂已遂ノ罪ニ依リ処断スヘキニ十六名ヲ現ニ已遂  
罪トシテ論スルニ該條ヲ適用シタルハ擬律錯誤ナリ若シ原裁判ハ被害者ノ死ハ十六人中何人ノ所為ナルヲ知ルヘカラ  
サルヲ以テ皆已遂犯ナリトセンカ不分明ハ則チ無罪ナリト云フ法ノ原則ニ背キ一人ノ現犯者不分明ナル故ヲ以テ數人  
ヲ刑スルノ理アルヘカラス然ルニ刑法第四百四條ヲ誤用シ被告ヲ同法第二百九十六條ニ擬シタルハ錯誤ノ甚シキモノナ  
リ其他第一第三第四第六第七ノ所為モ事實ヲ誤リ國事犯ヲ常事犯トシ被告カ関セサルコトヲ教唆トシ朋友間ノ相議ヲ  
強盜トナシタルハ不法ナリト云フニアリ對手人檢事塩野宜健ハ上告趣旨ノ理由ナキ旨答弁セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五条ノ定式ヲ履行シタルニ代言人仁杉英ハ上告趣旨ヲ拡張シ原判文第二第三第四ノ事實ニ被告カ教唆ノ理由ヲ示サスシテ刑法第一百五条ヲ適用シ且第二ノ事實ニ於テ被告カ加波山ニ止リ在ルヲ認メナカラ第三第四ノ所為ヲ指令シタリトセシハ事實理由ノ齟齬セシモノナリ又第五ノ事實ハ臨時殺意ヲ生シタルモノト認メナカラ刑法第四百四条ヲ引キ被告ヲ共犯トシタルモ共犯トハ共謀一致ノ事實ナカルヘカラサレハ本件ノ如キ故殺ノ場合ニ於テ共謀アルノ理由ナシ然レハ他ノ共謀セシコトヨリ引續キ他ノ者カ共謀ノ限界ヲ出テ別事ヲ犯シタルハ各人各固ノ所為ナリ若シ之レヲモ共謀トセハ其理由ヲ示サ、ルヘカラス又已ニ犯シタル罪ヲ免カレンタメトハ何レノ罪ヲ指シタルカ之等ノ明示ナク又刑法第二百九十六条ノ人トハ通常ノ人ヲ指シタルモノニテ官吏ヲ指シタルニ非ス加之同一ノ事實タル第七ノ所為ニ付テハ刑法第三百三十九条ヲ適用シナカラ只タ殺傷アルノ故ヲ以テ同第二百九十三条ヲ適用シタルハ事實ヲ齟齬シ擬律ヲ錯誤セシモノナリ其他第一第六第七ノ事實ニ付テモ各自ノ所為ヲ明示セス被告ニ対スル事實ヲモ示サス且証人勝田トク以下十数人ノ調書ヲ証トシタルモ同人等ハ栃木重罪裁判所ニ於テ河野広躰等ノ証人トシ宣誓セシメタルモノナルニ被告ニ対シ証人トシタルハ越權ナリト論告シ立会検事川日亨一ハ本人上告趣旨及ヒ拡張論旨トモ理由ナキ旨意見ヲ開陳セリ依テ之ヲ審理判決スル左ノ如シ

上告ノ理由トスル処要スルニ被害者ノ死ハ一人ノ投シタル一個ノ爆裂薬ノ為メナレハ何人ノ所為ナルカラ審理スヘキニ果シテ被告ノ所為ナル事實ヲ認メス且其証ナキニ十数人ヲ故殺ノ共犯トナシ刑法第四百四条ヲ誤用シ共ニ同一ノ刑ニ処シタルハ不法ナリ等ノ論旨ナレトモ原裁判言渡ヲ閱スルニ其第五ノ事實ニ被告ハ杉浦吉副等十五名ト共ニ刀劍又ハ爆裂弾ヲ携ヘ云々突然逮捕ノ警吏ニ出会セシヨリ被告及ヒ其他ノ共犯ハ已ニ犯シタル罪ヲ免カレンタメ頓ニ殺意ヲ生シ爆裂弾ヲ投ケ或ハ刀ヲ抜キ以テ云々トアリテ其警吏ヲ殺害シ又ハ負傷セシメタルハ被告外十五名カ臨時共同連合ノ

働キニシテ共犯ノ事實明カナレハ縦令被害者ノ死ハ一個ノ爆発彈ノタメニモセヨ何人ノ之ヲ投シタルヤハ敢テ必要ナル事實ニ非ス而シテ刑法第四百四条ハ共犯者ハ皆正犯トナシ各自同一ノ刑ニ処スルノ法意ニシテ各自ノ所為ヲ細別シテ各別ノ刑ニ処スルノ法意ニ非ス故ニ原裁判所ハ決シテ下手者ノ不明ナル故ヲ以テ皆正犯トナシタルニ非サルノミナラス事實及ヒ法律ノ理由齟齬又ハ事實理由不備擬律錯誤等不法ノ判定ニ非サルナリ其他國事犯ヲ常事犯トナシ被告ノ關係ナキコトヲ教唆セシトシタル等ハ不法ナリト云フハ單ニ事實認定ノ批難ナレハ上告ノ原由ナシ而シテ又擴張前項ノ理由ハ教唆ノ理由ヲ示サス或ハ理由ニ齟齬アリト云フモ原判文第二第三第四ノ事實ニ被告ハ三浦文治外九名ヲシテ云々掠奪セシメタリトアレハ即チ教唆シタル事實明カナリ而シテ其教唆シタル現場ニ在ラサル限りハ為ス能ハサルモノニ非サレハ當時被告カ加波山ニ在テ現場ニ在ラサルヲ認メタリトテ事實理由ノ齟齬ト云フヘカラス又第五ノ事實ニ付共犯ハ共謀ノ事實ナカルヘカラサレハ故殺ノ場合ニ共謀アルノ理ナシ又ハ共謀外ノ事實ハ各人各個ノ所為ナリト云フモ現ニ二人以上共ニ罪ヲ犯シタルトキハ即チ共犯ナレハ故殺ノ場合ニ於テモ決シテ共犯ナシト云フヘカラス何ントナレハ刑法第四百四条ハ刑法ノ総則ニシテ同法第三百五条ノ如ク特ニ之カ例外ヲ定メタル明文アラサル場合ハ一般ニ之ヲ適用スヘキモノナレハナリ而シテ原判官カ共犯ノ事實ヲ認メタルハ前段弁明ノ如クナレハ共謀ノ理由ヲ示スヘキ必要ナシ又已ニ犯シタル罪トハ判文第一乃至第四ノ罪ヲ指シタルモノニテ決シテ明示ナキニアラス又第五ノ事實ト同一ナル第七ノ所為ニ付刑法第三百九条ヲ適用シナカラ第五ニ對シ第二百九十六條ヲ適用シタルハ不法ナリ又ハ同条ノ人トハ官吏ヲ指スニアラスト云フモ刑法第三百九条ハ單ニ官吏ニ抗拒シタル場合ニテ若シ殺意ナク創傷セシメタル場合ニテ若シ殺意ナク創傷セシメタルトキハ其第四百十條ニ之カ制裁アルモ故意ヲ以テ之ヲ殺害シタル場合ハ官吏タルト一般ノ人タルトヲ問ハス刑法第二百九十六條ノ制裁スルハ該條ノ明文ニ因テ明カナレハ原判官ノ認メタル第五ノ事

実ト第七ノ事実トハ自ラ其所為異ナルヲ以テ適用セシ法条モ亦異ナルハ勿論ニシテ決シテ事実ノ齟齬擬律ノ錯誤ト為ス可カラス其他第一第六第七ノ事実ニ付テハ被告ハ杉浦吉副以下十数名ト共ニ云々又ハ被告外何名ハ云々トアリテ被告ニ対シ犯罪ノ事実ヲ明示セシモノナリ且勝田トク外十数人ハ本件ノ証人トシタルニアラス只其調書ヲ証拠ノ一ツニ採リタルモノナレハ仮令他ノ裁判所ニ於テ他人ノ証人トナシ宣誓シタルモノト雖モ其調書ヲ取捨スルハ素ヨリ判官ノ権内ナレハ決シテ越権ト云フヲ得ス依テ上告趣旨及ヒ拡張論旨トモ総テ相立サルモノト判定ス  
以上ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七条ニ依リ本件上告ハ之ヲ棄却スルモノナリ

大審院ニ於テ檢事川目亨一立会宣告ス

大審院刑事第二局長 池田 弥一 ㊟

大審院評定官 河口 定義 ㊟

大審院評定官 土師 経典 ㊟

大審院評定官 山本 昌行 ㊟

大審院評定官 谷津 春三 ㊟

裁判所書記 石坂 義雄 ㊟